# 讃神学園事件

さいわい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

讃神学園事件

【Ｎコード】

Ｎ１９２９Ｘ

【作者名】

さいわい

【あらすじ】

自称平凡な高校生、吾川蒼輔は、孤島にある讃神学園に転入するため、讃神島を訪れる。讃神学園はエリート教育に力を入れた学園で、それだけにクラス間の対立が激しい学園だった。さらに讃神学園では一年前から学生の失踪が頻発していた。しかも失踪者は船を使った形跡がなく、島から出ているはずがないという。島で知り合った神田京一、住吉穂乃歌と共に失踪者の一人、見澤灯を捜索することになった蒼輔だったが、捜索は難航しやがて行き詰る……。失踪者はどこへ行き、讃神学園ではなにが行われているのか。蒼輔

はやがて自身の思いもよらなかった事実を知ることになる。
（とりあえずストック切れるまでは週一で更新します。土曜日です）

# 第一話：讃神島

やれやれ、勘弁してくれよ。

風が強い。吹き飛ばされそうなほど強い。海風だ。寒い。見渡せど見える風景は変わらない。島が行過ぎて島が行過ぎる。島、島、島。

そして海。見渡す限り海。

もう三時間も船に揺られているのか。エンジンの音が喧しい。海を切ってできる白波が船体から長く尾を引いている。

かもめが二羽飛んでいった。

「俺の名前は吾川蒼輔、１６歳。性別男性。これと言って特徴のない、平凡な高校生、……か。

向かっているのは讃神島。無人島だった、海岸線長５ｋｍほどの小さな島だ。ここにはある学校がある。というより、学校しかない。私立の大きな学校だ。讃神学園。正式名称ではないが、その学校はそう呼ばれている」

ん？　なんだありゃ。

帽子か？

あんな高いところを……風が吹いたから、誰かの帽子が飛ばされたのか。讃神学校の校章が付いている。

その後ろを――女の子が走ってる。あの子の帽子か。制服を着てるから、たぶん讃神学校の生徒だろうな。

あの２階部分も人が入れるのか。景色が良さそうだから、後で俺

も行ってみるか――。
おいおい、あの子、帽子ばっかり見て、危なっかしいな。向こうは手すりもないから、どうかすると落っこちちまいそうだ。
――風が吹いて――帽子がこっちに来た。
女の子は、一目散に帽子を追いかけてる。
空中に向かって足を――
やばいっ

どん！

ってー。腕が痛い。人ひとり受け止めたんだから、当たり前だ。
……どうやら、無事のようだな。
「勘弁しろよ。大丈夫か？　怪我は？」
「すばらしいね。わたし、あそこから落っこちちゃったんだ。君が受けて止めてくれたんだね。ありがとう」
２階から落下したにしては落ち着いてるな。ちゃんと立ってるし、怪我はないようだ。俺の腕は、ああ、ちょっと赤くなってるな。
しかし、よくこれだけで済んだもんだ。受け止める方も、受け止められる方も、最良の体勢とタイミングだった。偶然の女神に愛されたとしか言いようがないな。
「あーあ、帽子が」
この期に及んでまだ帽子の心配か。のんきなもんだ。
帽子は――ああ、ありゃもう無理だな。海に落ちちまった。
「もう諦めろよ」
「命があっただけでも上出来だね」
落胆した様子はなく、ケタケタと笑っている。瞳が大きくて、黒目がちでなにを考えているのかわからない印象を抱かせる。にもかかわらずその目が宿している光は強く、深い。そして表情はどこま

でも穏やかだ。
髪は首筋まで伸ばし綺麗に整えられ、光をよく反射する黒髪だ。時々吹く風にやわらかくなびいている。
「改めて、どうもありがとう」
「別にいいよ。でも気をつけろよ」
「うん。……あれ、君、転校生、つーか転入生だね。何年？　わたし、山輪朱姫（あけひめ）。今度から二年。よろしく」
と、朱姫は敬礼する。
どうして転入生だとわかったんだ？　服装が制服なのは彼女と同じ。その他、目の前の少女と違うところはないはずだ。
「よく転入生だとわかったな」
「てことはビンゴ、だね。理由？　その前に、君の自己紹介は？」
ああ。
「俺は吾川蒼輔。新学期から讃神学園高等部二年に転入する。同学年だな。よろしく」
「オーケイ。じゃ理由だったね。簡単だよ。わたし、エスパーだから」
微笑みながら冗談を言っている。勘弁してくれよ。
「そうか。それなら納得だ。俺もいくつか仮説を立ててみたんだが、外れたみたいだ」
「今の一瞬で？　それはすばらしい。聞かせて」

「1、俺の挙動がそわそわしていたから、島に来るのは初めてなんだと思った」
「ぶつくさ呟いてるのは聞こえたけど、堂々としてると思うよ」
う、聞かれていたのか。
「……内容は聞こえた？」
「風鳴りがひどかったから……。えっちぃ内容だった？」
昼間から下ネタを呟く人間がどこにいるんだ。

「なわけねーだろ。でもそれも仮説の一つだ。ちょっと島についておさらいしてたんで」
「聞けば君が転入生だとわかるような内容だったわけだ。でも、聞こえなかったから違う」
「3、ただの勘」
「合理的。でも外れ」
「その4、君は実は超絶記憶能力者で、全校生徒の顔を記憶している」
「それはすばらしい解答だね。でも、わたしが一番苦手なの、暗記科目なんだ」
「5、山輪は――」
「朱姫でいいよ。その代わり、わたしも蒼輔って呼んでいい？」
おいおい、勘弁してくれよ。
「わかった。朱姫は転入生が来ること、及びその顔を知っていたのかもしれない――職員室で書類を見たとか」
「うちは個人情報の取り扱いにはうるさいんだけど……、ま、可能性はあったかもね。でも違う」
「どういう意味だ？」
「後で言う。それより、仮説はもうおしまい？」
「あとひとつだけ……。
どこかで前に俺と君は会ったことがある？」
「あ、最後の最後でナンパ？」
「ちょっとお茶でも飲むか？」
やれやれ、なにを言っているんだ俺は。
「初対面だと思うんだけど、蒼輔は違う？」
「いや、言ってみただけだよ。さて、俺のカードはこれでおしまい」
「じゃ、解答編だね。さて皆さん、ていうか蒼輔、答えはこれ」
朱姫は自分の左襟を指差す。

「これはピンバッジで、在校生の学年とクラスを表すものなんだ。わたしはこのデザインで、線が一本だからこないだまで一年だったってこと」
「なるほど、それをつけていない人間は在校生ではないということか」
「バッジはクラス替えしたあとの最初のホームルームで貰えるから、きっと蒼輔もそのとき貰えると思う」
「でも、今は春休みで学期の間なんだから、外してる生徒もいるんじゃないのか？」
「もちろんそういう子もいると思うけど、どうせ新しいのを貰うとき古いのを返さなきゃならないから、つけっぱなしの子が多いんだよ。だから、制服を着ているのにバッジをつけていない人間は、新入生か転入生ってこと。
以上、　証明終わり」
やれやれ、聞いてみれば簡単な話だ。

「そういや、さっき、個人情報の書類がどうこう言ってたけど、あれは？」
「ああ、転入生の情報だね。わたし、こう見えても生徒会やってんだ」
「へえ、生徒会長とか副会長とかってやつ？」
「そんな恐れ多い。わたしがやるのはもっぱら雑務だけだよ。でも、だから先生から転入生の情報を先に教えてもらう可能性はあったってこと。お世話してあげてって言われるとかね。
だから、いつでも頼ってね。わたしはあんまり頼りにならないかも知れないけど、会長とか副会長はすばらしい人たちだから」
生徒会か。
右も左もわからない転入生が学園のことを調べるのに都合がいいな。

「だったら、ちょっと讃神島学園のことをおさらいしておきたいな」
「いいよ。讃神島学園は私立の総合学校。正式名称は私立忽那学園讃神分校。忽那学園って言うのは国内有数のマンモス学校」
「国内各地に分校があり、総生徒数は五万人を超えるといわれている。いわゆるエレベータ式の学校で、その種類は小等部から大学まである、だったか？　高等部は分校によって、普通科、商業科、工業科、農業科、その他何でもござれで揃っている」
「残念、確か、保育園も兼ねる幼稚部もあったはずだよ」
「ほんとに何でもありだな」
「忽那学園の特色はその雑多性にあるよ。ある平均的な人間を育てるのではなく、たった一つだけでも特化された能力の持ち主を育てようというのがその教育態度の根本にある」
「おかげで、各界のエリートに、忽那学園の出身者は多い。例えば、プロ野球選手の一割が、学園出身者だとか、国内外で賞をとる芸術家や、科学技術界の権威の多くが忽那学園に関わったことがある人間だとか言われている」
「一番どこにエリートを輩出しているか、知ってる？」
「官僚、だったか」
「正解。特に、昔はそうだったって。忽那学園を国家公認の学園にするために、昔は官僚輩出のための教育に力を入れていたんだって」
　国家経営に最も実質的に携わることのできる官僚を多く輩出していれば、学園経営に圧倒的に有利だ。
「ということは昔は国家公認――つまり社会で学歴として通用する学園じゃなかった」
「そう。学園自体は戦前から創設されたんだけど、それはあくまでも私塾で、国家公認の学園になったのは戦後数十年経ってかららしいよ」
「ただ、忽那学園のすごさは、国家の教育方針に合わせたんじゃなく、国家に自分たちの教育思想を認めさせたところだな」
「そのための官僚育成。全く、とんでもない話だよね」

「現在は権力志向をする必要もなく、総合学習を行う国内有数の私立学校としてその名を轟かせている、か」
「有名なだけに、外からの転入生も多いよ。蒼輔もその一人だね」
「そういうことだ。開かれた学校なのは、多くのとがった人物を育成しようという学園の思想とも関係があるんだろうな」
「他校で育った、恵まれた才能を持ちながら普通の学校ではその才能を伸ばすことが難しい人間。そうした人たちの受け皿としても、忽那学園は機能してきた」
「国家教育の否定が根本にあるんだから、いいことだけでもないんだろうけどな」
「でも公認は受けているんだから、ちゃんと学習指導要領は満たしているはずだからご心配なく」
「忽那学園自体についてはこんなもんか。讃神学園は、普通科の学校なんだよな」

「そう。いわゆる中高一貫校で、高等部は普通科。国家公認になる前からある、忽那学園としては古い学校で、孤島にあるのは学習に集中できる教育環境の提供のためだとか」
「そんなんで孤島に住まわされるのは勘弁してほしいけどな」
「そのおかげか、優秀な人はすばらしく多いよ。蒼輔もそう？」
「まさか。俺は可もなく不可もない人間だよ」
「蒼輔は讃神学園に来るの嫌だった？」
「別に、そんなことないけど」
「不安とか苦しいことがあったらなんでも言ってね。生徒会は生徒の悩み事何でも聞きますってとこだから。学生相手がいやなら、学校カウンセラーも多く配置されてるし」
「讃神島自体は、無人島だったんだよな」
「戦後すぐ学園が設立されるまでは、ね。だから学園以外の民家みたいなものは何もない島だよ。戦中、軍事基地が置かれる計画があ

ったみたいだけど、結局お流れになっちゃったって」
「要するに、何も無い島だな」
「ドンマイ、学園があるよ」
よくわからない励ましだな。
「大体こんなところか。うん、よくわかった。ありがとう」
「どういたしまして。ついでにクラスの話もしとこうか。蒼輔はどのクラスになりそう？　わたしは多分緑だと思うんだけど」

「緑？」
「組のことだよ。このバッジ、色が緑でしょう。バッジでクラスは色と形で表すから、クラスのことを色で呼ぶことが多いんだ。色の種類は赤・青・黄・緑。かける形が三種類で全十二クラス。ちなみにクラスの色によって、生徒の大体の傾向があるんだけど」
話好きな子だ。友達が多いだろうな。
「どんな？」
「評価の優秀な順に、赤・青・黄・緑。赤がトップで、青はそれと同等か少し下くらい。黄はまずまず、かな」
「朱姫の緑はどうなんだ？」
「ええと、そうだね、まずまずよりほんの少しだけ下というか、人間やっぱり楽しいのが一番というか……」
要するに馬……いや、言葉にするのは止めておこう。
「三種類っていったのは、学業組と運動組と芸術組に分かれるからで、内訳を言うと、本が学業、靴が運動、筆が芸術」
「クラス決めの際の評価の対象がこれになるわけだ」
「もちろん、組が違うからといって特別なカリキュラムがあるわけじゃなくて、生徒の特徴の傾向がそうだというだけの話だけどね」
「だけど、忽那学園の特色からいって、その傾向ってやつが重要なんだな」
「そういうこと。わたしはなったことないからよくわかんないんだ

けど、運動組とか芸術組は勉強しなくてもほとんど指導されないって聞いたことがあるな」
他の学校でいう、特待生みたいなイメージか。
「四色×三つの形だな、よし。
朱姫は学業組、というより一般的な学生のクラスか」
「そう。といっても、あくまでも傾向という話で、実際は運動が得意じゃない子でも運動組に入ることはあるし、成績優秀な人でも緑になることもある」
「――自分みたいに成績優秀な人でも、か？」
「ピンポン大正解」
……おいおい、目が泳いでいるぞ。
「で、どう？　蒼輔はどれになりそうだと思った？」
「さて、自分で自分のことを評価するのは難しいからな。運動にも芸術にも縁がないから、おそらく普通組だろう。成績は、別に優秀ってわけでもないし、かといって馬鹿ってわけでも……あ」
「馬鹿って言っちゃった」
「馬鹿って言っちゃった」
「……」
「……ごめん」
「いえいえ」
「とにかく全体的にそれなりだとすると――」
「黄色、かな。ま、もちろん実際のクラス分けは成績がダイレクトに反映されるわけじゃないからピンキリなんだけどさ」
「なら、俺が緑になる可能性もあるってわけだ」
「同じになるかなあ。そうなったら嬉しいね」
……緑になるのは、困るんだけどな。
「あのさ蒼輔、ちょっと聞きたいんだけど、やっぱりわたしと君って、どこかで会ったことがない？」
「今度は朱姫がナンパか？」
「今からお茶でもどう？　島に喫茶店なんてないけど」

おいおい。
「会ったことはない、と思う。けど会ったことがあるような気がするのもほんとだ」
「すばらしいね。わたしも一緒。ほんとにどこかで会ったことがあったりしてね」
どういうことだ？　二人揃って記憶喪失か？
「前世かどこかで会ったことがあるのかも知れないな」
「運命ってやつかもよ。でもだったら、わたしとしてはあんまり好ましくないな」
「そうなのか？　女の子ってのは運命って言葉が好きなんだと思ってたけど」
「運命なんて嫌いさ。人の人生ってもんは自分で切り開いくものだとわたしは思う」
「強いな」
「うーん、まあいいか。これからよろしくね、蒼輔」
「こちらこそよろしく、朱姫」
握手する。
……ん？

「何か聞こえない？」
「何か――声？　怒鳴り声だ」
「室内からみたいだね」

## 第二話：対立

音に驚いて蒼輔と朱姫は船室のドアを開ける。
おいおい、なんだこりゃ。

机と床がこすれる乾いた音が響いた。続いて人間の体が壁に叩きつけられる音だ。振動が船体に伝わって、船が大きく揺れる。
どうやら喧嘩らしい。客室は机と椅子が散乱し、整然としていた様子は見る影もない。室の端に怯えるようにして幾人かの人間。そしてその視線の先には二人の人間。
壁際でうずくまっているのが殴られた人間で、その前に仁王立ちしているのが殴った人間だろう。両名とも学生のようだ。

「てめぇ、ぶっ殺してやる」
物騒な声室内にこだました。十代の若造が出しているとは到底思えない。
が、当の本人は学生服を着ているからほぼ間違いなく学生だろう。殴りつけた相手が起き上がる前から、追撃の手を加える。
まずいな、このままだと大事になるかもしれない。
殴られているほうはもう意識を失いかけている。
よく見れば殴っているほうも服装が乱れ口の端が切れている。一方的な喧嘩だったというわけじゃないらしい。
だが現状はよほど一方的だ。ルールのある決闘なら既に審判が止めに入っているだろう。ここらで収めなければ、これはただの虐待だ。
周りを見れば、誰も彼も怯えるばかりで止めに入ろうとする者はいない。

――全く、勘弁してほしいもんだ。初日早々、こっちは島に着いてすらいないんだぜ。
ん？　朱姫の様子がおかしいな。
どうやら飛び出そうとしているらしい。怯えてるかと思ったら、勇敢なんだな。
確かにこの場は納めなければならないが、か弱い女の子がやる仕事じゃない。
やれやれ本当に、勘弁してほしい。
騒ぎに巻き込まれるなんて、得策じゃないんだ。

朱姫を手で制し、飛び掛る。
よ、と。
殴ってるやつを、後ろから力ずくで引き剥がす。
「なにしやがる！」
おっと。腰の入ったいいパンチだな。だけど俺に当てるには、百光年遠い。
パンチの勢いを利用して、大外狩りを決めてやる。投げ飛ばした後は、横四方固めだ。
やれやれ、そんなにジタバタすんなって。動けないだろ、どうせ。
お、なるほど、こいつもバッジつけてるな。赤い。
「いきさつは知らんけど、この辺にしとけって。近所迷惑だろ」
……。
ふう、漸く諦めてくれたらしい。
さて、こいつはどうしたもんかな。
「蒼輔、すばらしいね」
「朱姫か。これ、どうすりゃいい？」
「どうって……どうしようか。あんまり、おおごとにはしたくないんだけど、こう公の場でやられちゃうと、そうも行かないよね。先生には報告しとくよ。もう離してあげたら？」

暴れた人間は大人に引き渡して一件落着か。
ま、そんなとこかな。
「じゃ、わたしは行くね」

さて、こいつはもうそろそろ離しても大丈夫か……。
ぞく。
なんだ、この感覚――？
！
紙一重のところで、背後からの一撃を交わす。
交わすというより、受け止めるといったほうがいいかもしれない。
さっき殴られていたほうのやつだ。手になんか握ってる。
勘弁しろよ。
こいつはナイフじゃないか。
切っ先には触れないように交わし、腕の部分を抱え込むように受け止める。
やれやれ、危なかった。
俺を狙ったんじゃないな。
こいつへの反撃か。
悪いがこんなもんはこっちに渡してもらう。
ぐいと、ひねりあげて、手に持っていたものを奪いとる。
おいおい、こりゃ――バタフライナイフ、だな。学生が護身用に持ち歩くには、ちょっと度の過ぎたもんだ。
こいつ、なんでこんなもん持ち歩いてんだ。
しかも、さっきの感覚……俺の感覚が正しければあれは殺気だった。単なる感情任せの怒りや憎悪じゃない。ただ相手を殺すということだけを考えた気配だった。
そんなもん、ただの学生から感じる気配じゃないぞ。
ん！
……思わず、跳ね飛ばしちまった。

こいつ、なんて目をしてやがる。ただ冷酷な、殺人鬼の目だ。
なんだよこりゃ。勘弁してくれよ。
「大丈夫かよ、お前」
荒い息が次第に収まっていくとともに、目のぎらつきが薄まっていくのがわかる。
徐々に普通の少年の顔に戻っていく。
興奮に身を任せての所業、か。
キレる若者かよ。こえーこえー。
どうやらナイフのことは周りにはばれてないみたいだな。
気づかれないように……よし、懐にしまいこめた。
もう興奮は収まったようだな。今はただの落ち込んだ人間の目だ。
「そんな気にすんなって。こいつのことは、黙っててやる。だけど、こんなもんは没収させてもらうからな」

「蒼輔、大丈夫？」
朱姫か。後ろに大人たちも見える。朱姫から説明を受けた教員たちだろう。
大人たちが、それぞれに暴れたやつらを引き取っていった。これから島に到着するまで、彼らの監視下に置かれるんだろう。
「殴られたほうにも襲われたよ。気性の荒いやつの多い学校だな」
「大丈夫？　怪我はない？」
「ああ。やれやれ、なんて学校だ。転入したら最強伝説でも作っとくか、こりゃ」
「こんなときに冗談言えるなんて、蒼輔、なかなか度胸があるんだね」
「そっちもな。闇雲に飛び出そうとしやがって、おかげで俺がとばっちりだ。勘弁してほしいな、全く」
「でも蒼輔、かっこよかったよ？」
よく言うぜ。

……そう？
「うーん、あのふたり、ちょっと興奮が過ぎたみたいだね。どう蒼輔。大騒ぎにするつもり？」
「朱姫はどうなんだ。生徒会の一員として、どう収めるつもりだ？」
「そうだね。会長に相談かな」
他人任せかよ。
「先生たちには、生徒会に一任してくれるようお願いしてみるつもり。人望あるからね、生徒会長は。だから問題は、蒼輔が胸に収めてくれるかどうか」
「大事件にするつもりはないよ、俺も。……だが」
さて、このまま放っておいていいのか？
「蒼輔の気持ちもわかるよ。だけど、ちょっと後で話せないかな。判断する前に、聞いておいてほしいことがあるんだ」
「どんな話だ」
「ネガティブな話だよ。うんざりする」
「そりゃ勘弁願いたい。そうも行かないんだろうが」
「ビンゴ」
自嘲気味に笑った後、周りで見てる大人のほうに向かっていった。まだ何か大人たちと話があるんだろう。
とりあえずは落着か。

コーヒーでも飲みたいな。自販機は……あった。
全く、初日早々こんな事件に巻き込まれるなんてな。
やれやれ、勘弁してほしいな。
……ん？
「よう、大した捕り物だったな。やるじゃねえか」
誰だこいつ？
よれよれのシャツに、ジーンズ……年齢が判別しづらいな。俺たちと同じくらいにも見えるが、もう少し上かもしれない。長髪が少

しうざったい男性だ。
「あんたは？」
「俺か？　見ての通り、教師だ」
「どこをどう見りゃ教師なんだ？」
「手厳しいね、こりゃ。童顔は生まれついてのもんだってのによ、どいつもこいつも人を子供に見やがって。俺、中二まで電車子供料金で乗ってたもんさ」
なんだこいつ、酔っ払いか？
う、ちょっと酒くせえ。
「昼間っからビールかよ」
「おお、大人がビール飲んで、なにが悪いってんだよう。こちとら、とうに二十歳は超えてますーだ。もっとも、二十歳前から飲んでましたがねーっとこりゃ」
……勘弁してくれ。
「おぉっと、どこ行くんだ少年。おぢさんの話はまだ終わってないぞぉ」
「俺はあんたに用がない」
「手厳しいね、こりゃ。少年、身のこなしは誰に習った？　高校程度であれだけやれりゃ、なかなかのもんだ」
「そりゃどうも」
「褒めてねえよ。少年、いいか、能ある鷹は爪隠すってもんだぜ。それが、おめぇ、こんな酔っ払いに手の内知られちまってる。駄目だぜぇ、少年。失格」
何が失格だよ。
「ただのまぐれだよ」
「まぐれまぐれ、マグレねぇ。まぐれも実力のうちってな。どうだ少年、強くなりたかったら俺の弟子になってみんか」
別に強くなりたかねぇ。
「……あんた、何もんだよ」
「まず自分から名乗ったらどうだってんだ」

ちぇ。そっちから絡んできたくせに。
「高等部二年の、吾川蒼輔だ。この春から転入する」
「転入生か。なるほどなあ。いいだろう。俺は石手博通ってんだ。科学の教師やってる。俺はこう見えて、昔達人と呼ばれた人間なんだ」
「達人だと？」
「そうさぁ。酔拳の達人。アチョー」
……なんだただの酔っ払いか。
「しょーねぇん、ちみもいっぱしの格闘家になりたかったらおぢさんの門をくぐれ。そして滝にうたれ……おぉい少年、どこへ行く」
……付き合ってられん。

甲板だ。少し風も収まってきたようだな。
しかし転入早々、いや転入前だというのに目立ってしまうとは、何たる失態。
有名になるのなんて、勘弁してほしいんだけどな。
ん、誰かが手を振ってんな。
「蒼輔、こっちこっち」
朱姫だ。
「へさきで何やってんだ」
「ほら蒼輔。豪華客船ごっこ」
誰がやるか。
「朱姫、先生たちの説得はどうだった。納得してくれたのか？」
「まずまず、だね。全員、おおごとにはしないってさ。いったでしょ、うちの会長は人望が厚いんだよ」
「讃神学園の生徒会には大分権限があるようだな。話っていうのは、そのことか？」
「ううん。会長の話は、おいおいとね。うんざりする話っていうのは、讃神学園に広がる対立のこと」

「どういう話だ」
「クラス別けの話はしたよね」
「ああ。クラスは色で表され、赤が鼻持ちならないエリート、赤がその下に甘んじる集団、黄が中途半端、緑はバカだっけか？」
「すばらしく悪意のある記憶の仕方だね。性格疑うよ」
「冗談ということにしといてくれ」
「ということにしておいてあげよう。でもその悪意のある捉え方で正解。要するに、多くの生徒が、そういった悪い捉え方をしている。するとどうなるか」
「他クラスに対する侮蔑と、自己嫌悪」
「半分正解。人間、なかなか自分の欠点にまで目が回らないもんだよ。目が回らないというより、認めることができないんだな。結果、他クラスに対する侮蔑だけが残る」
「そして自分たちのクラスに対する愛級心が生まれ、自クラスの他クラスに対する愛護意識が強くなり、最終的には他クラスに対する敵意が生まれる、か」
「そう。だから、讃神学園には今ものすごいクラス間対立が生まれているの。特にひどいのが赤と青。お互いにエリート意識があるぶん、敵対心も強いみたい」
「俺はそんなところに転入するのか。なるほど、勘弁してほしい話だな」
「さっき喧嘩してた二人――蒼輔が止めてくれた二人も、それぞれ赤組と青組だよ」
　クラスの対立の結果が、さっきの殴り合いか。
「ちょっと待てよ。クラス別けっていっても、流動的なんだろう？　朱姫は新学期どのクラスになるかわからないって言った。要するに、クラス替えがあるってことだ」
「そう。クラス替えは学期ごとに行われるよ」
「だったら、クラス内のメンツはいつも違うことになる。だったら、身内意識なんて生まれようがない……少なくともそれほど生じない

はずだ」
「そうだったらよかったのだけど……むしろ、だからこそのエリート意識なんだな。特に赤組と青組はかなりその間で生徒が行き来しているの。だから、赤組に残れずに青組に行った生徒を青組は差別するし、自分たちを見下す赤組を青組は憎悪する」
「エリートも大変ってことだ」
「その点緑はバカだから安心――ってなに言わせるのさ」
俺はそこまでは言ってねえ。
「わかっておいてほしいんだけど、例え学期が変わって別のクラスになったとしても、それは何らかの栄誉だったり落第だったりするんじゃなくて、それはただのクラス替えなんだ。クラス別けに傾向があるって言っても、それはあくまでもそういう傾向があるってだけの話で。成績優秀な人が赤組になることも、黄組になることもある。緑に来る可能性だってある。クラス別けによる階層化なんて、ほんとは生徒たちの噂に過ぎない。だけど、一部の生徒にとってはクラス別けがある種のステータスになってしまっている」
「噂が弊害を生む。閉鎖環境じゃよくあることだな」
「蒼輔もその閉鎖環境の一員になるんだけどね」
「勘弁してほしい話だ」
「だから私は――ううん、生徒会は何とかその対立構造を解消しようとがんばっているんだよ。まだ成果は挙げられていないけど、いつか何とかするから――」
「だから今回は見逃せってか。俺の意見を言っていいか？」
「虫が良すぎるって言うんでしょう？」
「いや、朱姫と生徒会の決意には拍手を送りたいくらいだよ。だが、いつまでも潜在化させておいたら、いつか思わぬ形で決壊するかも知れない。ダムの決壊は、水を溜めていればいるほど規模が大きくなるんだ」
「……うん、わかってる。その前には必ずなんとかする」
だが、さっきの生徒のナイフと、殺意。

意外と決壊の時は近いのかもしれない。
どうする？
もしここで反論するのなら、俺もこの問題に主体的に関わらなければならなくなる。
できればそれは勘弁なんだよな。
「わかった。朱姫と生徒会を信用する」
だが――それでいいのか？
せめてナイフくらいは、渡しておいてもいいかもしれない。
だが、おおごとにしたくないという朱姫の気持ちも理解できる。
本当に、今大騒ぎしなければならないほどの問題なのか？
「ありがとう。大丈夫だよ。私はともかく、会長と、副会長はとてもすばらしい人たちだから。蒼輔は、蒼輔の学園生活を送ることに専念して」
そうだ、それはその通りだ。この問題は、俺には何の関係もない。
だが、本当に、それでいいのか？
「朱姫」
「なあに、蒼輔」
「いや、がんばってくれ。俺にできることがあったら何でもする」
蒼輔に言えたのはそれだけだった。――――

――――白い雲、青い空、か。
やれやれ、なんだかいやな予感がしてきやがったぞ。
……ようやく島が見えてきたな。
讃神島。
俺がこれから暮らす場所、か。

# 第三話：上陸

微かに体が前へ投げ出されそうになるのを感じる。慣性の法則だ。
船が減速を始めたらしい。船体の周りに白い波が立ち始める。
どうやらやっと到着らしい。
やれやれ、長かったな。
「うん、無事に到着したね。蒼輔、讃神島にようこそ」
「……わざわざ丁寧にどうも」
「うん、すばらしいね」
何が素晴らしいんだよ。
……やれやれ、いい笑顔だな。
島に来た最初に朱姫みたいな気さくなやつに会えたのは幸運だったのかもしれない。単純に、一人でも知り合いができたってのは助かる。
さて、ここからか。

「蒼輔は、これからどうするの？」
「第一寮ってとこに向かうらしい。迎えが来てるはずなんだけど」
「……誰もいないね」
もう船着場には下りてるんだし、迎えが来てるんならここらにいても良さそうなもんだ。
「遅れてるのかな。どうする？　バス使う？」
「バス？」
「うん。讃神島内を巡回してるバス。学生は普段、これを使うよ。歩くと結構広いからね、讃神島は」
「バスは寮にも向かうのか？」
「もちろん。もし時間があるんだったら、わたし学園内を案内してあげてもいいよ。うん、すばらしい考えだ。そうしようよ」

「そりゃありがたいけど、朱姫に悪い」
「別に悪くないよ。……あーでもそっか、わたしこれから学生部に行かなくちゃならないんだったな。あーあ残念」
「学生部って？」
「生徒会のある場所。さっきの喧嘩、ちゃんと会長に報告しとかないとね」
「大変だな、生徒会ってのも」
「讃神学園はね、生徒自治っていって、学生で解決できることは学生で解決しろって校風だから。結構生徒会には権限が強いよ」
「そんな生徒会に入っているわたしってすごい」
「そうそう、すばらしいねわたし――じゃなくって、生徒会長や副会長はそれだけ有能な人だってこと」
「ふうん」
「どう蒼輔。わたしについてきて、生徒会見てみない？　それともいっそ生徒会に入っちゃう？　うん、それはすばらしい」
「勘弁しろよ。生徒会なんて柄じゃない」
「そうかな。瞬く間に生徒の喧嘩を仲裁しちゃった人なのに」
参ったな。やっぱり目立ったのはまずかった。
そういう評判を立てられるのは勘弁願いたいんだが。
「朱姫。そういうことは、あまり人に言わないで貰いたいんだけどな」
「どうして？　蒼輔が活躍したのは事実じゃん」
「できれば目立たないで過ごしたい」
「あーあ残念。もったいないよそういうの」
「引っ込み思案なんだよ」
「引っ込み思案、ねえ」
なんだよその目は。
「似合わないと思うけどな。蒼輔、生徒会が嫌なら、部活やりな。蒼輔ならどこでもエースになれると思う」
「だから、そういうのは勘弁。それにあれはまぐれだよ」

「まぐれねえ」
なんか疑うような目つきだな。
やれやれ、こういう活発な人間は、こういうところが面倒なんだよな。大人しくしていたい人間の気持ちがわかっちゃいない。
「まあいいや。まぐれということにしといてあげよう」
「ということにしといてくれ。だから生徒会も部活もやらない」
「運動会実行委員とか文化祭開催委員とか各種サークル活動とか」
「やめておく」
「クラス対抗合唱コンクールとか校内俳句大会とか色別対抗球技大会とか」
「興味ないね」
「ツンツン頭か。だったら目指せ大学一直線？」
「勉強は嫌いだ」
「……蒼輔、讃神学園に何しに来たの？」
さすがに朱姫も呆れた目だ。
そういう目で見られるのは、さすがにきついな。
「俺は日々が平穏に過ごせればそれでいいよ」
「あーあ、緩やか日常系ほのぼのコメディがお望みなわけだ」
「何のジャンルだよ」
「じゃ、蒼輔は謎のある、周囲に対してちょっと冷たい、けれど実は誰よりも友情に厚い転校生役ね」
「役って何？」
「で、わたしは幼馴染でおせっかいな、そのくせちょっとドジなヒロインで」
「なんで幼馴染？　転校生に？」
「まずいよ蒼輔。男の子と女の子が登場したら必然的にラブコメになっちゃう」
「そんな決まりごとはないよ？」
「うーんうーん、そうだ蒼輔、女装して」
「それで何の解決になるんだ？　別のジャンルになるだけだぞ？」

「あくまでもまったり男子高校生日常コメディがお望みなわけだ」
「いや別にそんなもん望んでない」
「いっとくけど蒼輔、ほのぼのコメディの需要があるのはそれが女子高生だからだからね。蒼輔みたいなそこそこかっこいいだけの、よく言えばまとまった、悪くいえば何の変哲もない男子学生まったり学園コメディなんて、十週打ち切りまっしぐらなんだからね」
「大丈夫だ朱姫。これは漫画じゃない」
そうだ、漫画ではない。
「ま、蒼輔の人生だからとやかく言わないけど、何もない学生生活ってのはつまらないと思うよ」
「そりゃそうだろうけどさ」
「讃神学園って、他校から生徒集めてるだけあって、いろんなことのレベルが高いんだよね」
「知ってるよ。どの運動部も全国大会出場の常連校なんだろ？」
「うん。そりゃ、他校からエース引き抜いてくりゃ強くもなるよねって話だけど」
「金持ち球団みたいなもんか」
「けど讃神学園は運動部だけじゃないよ。文化部もある。それに集めてくるっていっても何もエリートばっかり集めるわけじゃないのが讃神学園だから。レギュラーになれなくても頑張ってる学生はたくさんいる。ま、蒼輔はすぐレギュラーだろうけど」
「そんなわけないだろ」
「はいはいまぐれまぐれ」
くそう扱いがテキトーだ。
「部活が嫌な子はサークルに入るっていう手もある。いろんな子が集まってるだけに、小さいサークルが結構あるみたいだよ」
「ふうん。孤島だっていっても、することはたくさんあるんだな」
「勉強だって、先生方はかなり熱意を持って教えてくれるし、図書館には学術書も揃ってるから、やる気になれば大学レベルの研究だってできちゃうよ」

「……怖い学園だ」
「うん、だから、やる気になったら何でもやるといいよ。卒業するときに何も思い出がないなあってなったら、やっぱりさびしすぎると思うから。讃神学園なら、やる気になればいつでもなんでも打ち込めるから」
「わかったよ。やる気になれば、な」
「うん、すばらしいね」
やれやれ、またニコニコしてる。
「あ、生徒会だったらいつでも歓迎するからね。といっても雑用くらいしかすることないけど」
「だからそれはいいって。……バスはまだいいのか？」
「本数少ないから、結構待たされるんだよね。蒼輔の迎えも、まだ来ないみたいだね」
そうなんだよな。やれやれ、勘弁しろよ。
どうする？　本当にこのまま朱姫に同行するか――
「吾川蒼輔だな」
――ん、誰だ？

振り向くと白衣の女性が立っていた。年のころは三十を少し超えたくらいだろうか。
学園という単語にはおよそ似つかわしくない腰まで豊かに垂らした金髪に、くるぶしまで隠れるほど長くあつらえた白衣。蒼輔と目線が合うくらい、女性としては長身で、右手を頬にあてがい微笑をたたえ余裕のある表情を作っている。
「誰だ？」
「だーれだとはなんだ誰だとは。このかわいらしくも美しくかわいい美貌の女性の顔を忘れたとはいわせんぞー」
いて、いて。
頭を押さえつけてくるなよ。

「清美先生じゃないですか」
朱姫の声だ。
「あーら、そこにいるのはかわいいかわいい朱姫ちゃん。どうしたの今日はまた一段とかわいらしい。どこ行ってたの？　いいよねえ学生は春休みがあって。……なでなでなで。ああ、やっぱりいいわかわいい子は。かわいくない男子高校生なんて相手にしたくないわよねえ」
「あ、ちょっと、やめ、なでないで」
「やめろよ、朱姫が困ってるだろ。梅本清美おばさん」
「おばさんはやめな。おねいさん！」
やれやれ、これはまたありきたりな。
「おばさん？」
あーあ、なでなでのせいで朱姫の髪が乱れちまってる。ひどい人だな。
「ああ。梅本清美はれっきとした俺のおばさんだよ」
「だーからおねいさんと呼べって。全く、かわいくない甥っ子だこと」
「へえ、清美先生に甥っ子さんがいたなんて知りませんでした」
「そうなのよね。私もこんなかわいくない年齢まで成長しちまった甥っ子がいるなんて認めたくなかったんだけど、この春から讃神学園に転入するっていうじゃない？　だから叔母甥の関係でよろしくお願いされちゃったわけ。お願いされちゃったって、どうすりゃいいのって話なんだけど」
「寮まで送ってくれりゃいいんじゃねえの？」
「そういうことじゃねえっての」
いてえ。頭を叩くな。
「ったく、そんなんでほんとに養護教諭なんてやれてんのかよ」
「うわっ、こいつはほんとにかわいくないなー。ほれほれ、この白衣が目に入らんのか」
「だからなんだよ」

白衣が仕事するわけじゃないぞ。
「ね、ね、朱姫ちゃんからもなんかいってやって。私がいかにかわいらしい仕事ぶりを発揮してるかを」
「そうだよ。清美先生はすばらしい先生だよ。生徒たちによく話しかけてくれるし、ほら、自分のことを気さくに清美先生って呼ぶことを強要したり」
強要はするなよ。
「それに男子とか、清美先生に診てもらいたいってよくわざと怪我したりとかしてるよ」
「……マニアだな」
「なんか言った？」
「なんでもございません、清美おねいさま」
「よしよし、ちっとはかわいらしくなった」
やれやれ、勘弁してくれ。
「……で、どうして朱姫ちゃんと蒼輔が一緒にいるの？」
「島に来る船で一緒になったんだよ。ここに来るまで相手してもらってた」
「そうです。またすばらしい友達が一人増えました。あ、そうだ清美先生、船の中で蒼輔、かっこよかったんですよ」
「えーなになに聞きたーい」
「朱姫、だから、そういうことは人に言うなって」
「えー、いいじゃん」
「駄目だ」
「うーん……。どうしても駄目？」
「駄目」
「むー……。あーあ残念。そういうことで清美先生、今のは聞かなかったことにしてください」
よし。
ん？
なんだ？　この梅本の詮索するような目は。

「……ふむふむ、ずいぶんとかわいらしく仲のよいことだねえお二人は」
なにを言っているんだこの人は。
「はい。すばらしいです」
「朱姫ちゃんは会長と付き合ってるんだと思ってたけどねえ。違うんだ」
なんだと？
朱姫が生徒会長と付き合っている？
「え、ちょ、先生、何いってるんですか。違いますよ」
あ、違うのか。なんだ。
……だからなんだ俺。
「でもさー。蒼輔はやめといたほうがよくない？　だってさー、覇気もないし将来性もない。一緒にいて面白くもない。何よりほら、見て、かわいくない。何のとりえもないよこの子」
全否定かよ。
「そんなことありません。かっこいいです」
え、あ、そう？
「へええそう。かっこいいんだー。かっこいいんだってー。よかったね蒼輔、ひゅーひゅー」
「ちょ違、そんなんじゃなくて、ただ見てくれだけのことを言ったというか、異性としてどうとかじゃないっていうか」
……あーそう。
要するにお世辞ですかそうですか。
「あ、蒼輔。いや、それも違って、清美先生にからかわれてとっさにそういうことにしただけというか、……ってもう、なんでわたしこんなにいっぱいいっぱいになってるんですか。まだ会ったばかりなんだから、好きも嫌いもないですよ」
「じゃあ将来的に可能性はある、と」
「まあ、その……」
「うーんいいねえ。青春かわいいねえ」

なんだこの人のテンションは。
「じゃ、蒼輔。あんたはどうなの？　朱姫ちゃんのこと、どう思ってる？」
「こっちに振るな」
「かわいいと思ってんでしょ。どうなの、ほれほれ」
「こんな話しててもしょうがないだろ。ほら、ようやくバスも来た」
「ふーん。否定はしない、と」
「どうとでもとれ」
「じゃ、蒼輔とはここでお別れだね。清美先生たちは車ですか？」
「そうだよ。私の運転で送ってやる」
「それじゃ、清美先生。じゃあね蒼輔、また会えるといいね」
「ああ。同じ学園なんだ。会う機会もあるだろ」
「というか同じクラスになれるといいね。じゃ」
……行っちまったか。

同じクラスか……。
そりゃ、朱姫と同じクラスになりゃ楽しい学園生活なんだろうけどな。
「惚れたか？」
うわ、びっくりした。
「あーもー完全に目が恋する男の子じゃないのー。蒼輔、この、この。隅に置けないんだー」
まだそのキャラ続けるのかよ。
「俺の名前は呼び捨てですか」
「いいじゃない。そのかわり、私のことを清美おねいさんと呼ぶことを許可する。というか呼びなさい。これは命令。それに、敬語も必要ない。そんなもん、面倒くさいだけ」
……学生にもそう言って取り入ってるんだろうな。
「まーそうね。惚れるのは仕方ないさ。それは仕方ない。なんたっ

て朱姫ちゃん、学園でもトップ１０に入るくらいのかわいさを誇るからねー」
「まだこの話続くのかよ」
「感触からしたら脈アリって感じだったねー。押したら意外といけるかもって感じだったねー。その後どうなったか、かわいい報告よろしくねー蒼輔」
「勘弁してくれよ」
「でもね、恋人作るのはやめときな。恋人だけじゃない。これから先、気の合う人間も背中を任せてもいいと思える人間もできるだろうさ。でも、友達も恋人も作るな。いいね」
「理由は？」
「信頼はいつか必ず裏切るものだからさ。これは先輩からの教訓。さ、さっさと車に乗っちゃって。それからかわいらしくこれからのことを説明してあげる」

## 第四話：入寮

開拓地、って印象だ。讃神島はただの大地や林だった場所を切り拓いて学園に仕立て上げた場所らしい。車の窓から見えるのは林立する木々に碌に舗装されてない道。時折視界が開けたと思ったら教棟らしい建物が姿を現す。

ここは元々、無人島なんだよな。……なんでそんなところに学園なんか建てるかな。

道が舗装されていない上に清美お姉さんがスピード出しまくるから、ちょっと酔っちまった。気分が悪い。勘弁してほしいな。

小さな建物の前で清美お姉さんが車を止めた。

「ついたよ」

ここが第一寮だということなんだろう。

「要領は今話した通りだ。ま、せいぜいかわいくやんなさい」

どうやれってんだ。

「大丈夫だ。やるべきことは過不足なくやらせてもらう」

「当たり前だ。……それじゃね、蒼輔君」

「ああ、清美おばさん」

「おねいさんと呼べって」

いて。叩くなって。

……行ったか。

「これが学生寮、俺が今日から寝起きする場所か」

かなり古臭く見えるな。あちこちひびや汚れが目立つが、なんとか住むには問題ないというところだろう。三十部屋くらいはあるんだろうか。

こんなところでこれから寝起きしなくちゃならないのか。全く、勘弁してほしい。

ああ、あれが管理人室か。
「おや、あんた見かけない顔だね。誰か訪ねてきたのかい？」
腰の曲がった、人の良さそうな老婆だ。この人が寮の管理人なんだろうか。
「今日からこの寮でお世話になる吾川蒼輔です。まず管理人さんに挨拶しろといわれていたんですが」
「さて、入寮者の予定なんかあったかねえ。ちょいと、そこらへんに座っていてよ。ほれ、コーヒーでも淹れてあげよう」
独特の間合いを持った、というか動作の遅い人だな。こんなんで管理人が務まっているんだろうか。コーヒーなんていらないから、さっさと部屋に入れてほしい。
「さ、熱いから気をつけてお飲み。お菓子もあるからたんとお食べ。それで、あんたは何の用だったかねえ」
勘弁してくれ。
「今日入寮する……ああ面倒くさい。悪いがちょっと見せてもらう」
ポリポリとお菓子を食べながら、管理人は座り込んでしまっている。
さて、入寮予定者の書類なんかは……これか。
５０２号室、か。ついでに、部屋に住んでいる人間の名簿なんかも見せてもらおう。暗記するにはちょっと多すぎるな。
「どうしたい、名簿なんか見て」
うぉっと。
「す、すいません。個人情報ですよね、こういうのって」
「さあ、別にいいんでないの？　名前とクラスくらいしか書いてないんだし」
そう言われればそう、だな。
「４月から学園入るんかい。なんて言ったかな、あ、あがさ」
それじゃ推理作家だ。
「吾川です。吾川蒼輔」
「わたしゃ、見ての通り寮の管理人だ。でーも見ての通り老いぼれ

でね、あんまり問題なんか起こしてもらわないほうが助かるってわけよ。ほれ、５０２号の鍵だ。問題があったら、できれば生徒たちで解決してほしいんだよ。生徒自治っつーかね。なんならあんた、寮長やるかい？」
「そういうのは勘弁です」
「そうか。そういや寮長はこないだ神田君に任せたんだったかな？　そうかそうか。ま、あんまり問題起こさないようにやんなさい。問題があったら神田君に言うんだね」
「寮規みたいな、聞いとかなきゃいけないことは？」
「そういうのも、ぜーんぶ神田君に聞きなさい」
おいおい。
神田、か。名簿にそんな名前があったかな。
確か、神田京一。さて、どの号室だったか。
わ、階段の手すりの塗装が剥げている。他にも、全体的に汚れが目立つな。
一本電灯が切れてんな。あの管理人じゃ仕方ないか。
ま、明るい場所は苦手だから別にいいんだけど。
５０２……ここか。
「そこは空き部屋だよー」
ん、誰だ？
おとなしそうな男子だ。一見、子供っぽく見えるが、年齢は同年ぐらいだろう。寮生の誰かだろうか。
「空き部屋なのか？」
「うん。たぶん、会ったことはない人だよね。どこの寮の人？　誰か訪ねて来たの？」
「その前に、そっちは誰――」
いや、人の名前を聞く前にまず自分から、か。
「……俺は吾川蒼輔。今日からこの５０２号室に入るんだ。そっちは？」
「ああ、入寮する人だったんだー。それはごめんねー」

なんか間延びした空気のやつだな。
「僕は神田京一。京一でいいよ。この寮の寮長をやってるんだ。よろしくねー」
こいつが寮長をやってるっていう神田京一か。寮長って割にはあまり頼りになりそうにない。
「だったら俺も蒼輔でいい。よろしく」
「でもおかしいな。今日入寮者がいるなんて聞いてなかったんだけど」
「そうなのか？　こっちは今日の入寮はもう一週間も前から聞いてたんだけどな」
「うーん、管理人さんは教えてくれなかったな。管理人さん、人に寮長押し付けておいて、あんまり仕事してくれないんだ」
京一、なんか人の良さそうなやつだな。
「寮に入るにあたって、なんか聞いておくことは？」
「さて、なにかなあ」
考え込んでいる。どうも、何かの長って感じのないやつだ。
「まあ、大きな事件とか起こさない限り、自由にしててくれればいいよ、たぶん。第一寮はゆるい寮だから」
大きな事件、か。
「でもあんまり遅くまで出歩かないほうがいいかな、たぶん。門限も厳しくなったし、他の寮に行くにもやかましくなったから」
「どういう意味だよ」
「ああ、あんまり気にしないでよ。特に、まだ学園に慣れていない人にする話じゃないから」
学園にとってのネガティブな話題か。
……少し石を投げてみるか。
「学園内にはずいぶん深刻な対立があるらしいな。赤組と青組だったか？」
さて、どんな波紋が広がるか。
「へえ、よく知ってるね」

――案外、表情が変わらない。
手ごたえなし、か。
「言っとくけど、そういう話は誰かまわずにしないほうがいいよ。相手が赤組か青組の関係者だったら、たぶん大変なことになるから」
「どうなるんだ」
「半殺しかな」
あっさりと言ってくれる。
「マジかよ」
「まさか。だけど、青の誰かが、自分たちのことを茶化してきた人をリンチしたって、そういう噂があるんだ。噂だけなんだけど、たぶん本当だと思う。赤や青、特に赤とはあんまり関わらないほうがいいよ」
おいおい、なんて学園だ。勘弁してくれよ。
まさか京一が赤組か青組だって言うんじゃないだろうな。
「京一は何組なんだ？」
「心配しないでいいよ。僕はほら」
京一は襟のバッジを指差す。
黄色だ。
「正確には高等部普通科の元一年三組。たぶん新学期も黄だろうけどね」
「黄組ならそんな対立とか事件なんかはないってことか」
「黄はエリートじゃないからね。メンバーも割りと流動的だし」
「そりゃ良かった。で、門限が厳しくなったってのは？」
「気にしないでいいよ。たぶん、新入りに話すことじゃないからね。それはおいおい」
「気になる」
「参ったな。学園に対して妙な悪印象を持たないでほしいんだけど、言っちゃった僕が悪いか」
「大丈夫だよ。どんな悪いことを聞いたって、それで何かを判断することはない」

「実は、カクカクシカジカ」
「へーえなるほど。って、伝わるか」
「実はさ、失踪事件があったんだよ」
「失踪……か。誰かがいなくなったのか」
なるほど、それで寮の門限が厳しくなった、か。
「そう。去年の今頃くらいからかな。一人また一人といなくなって、もう１０件ちかくそんなことがあるよ」
「てことは、集団失踪事件ってわけだ」
おいおいそりゃ聞いてないぞ。
「失踪事件があったのは知ってたが、一人だと思ってた」
「へえ、よく知ってたね」
「どっかの雑誌に報道されてたんだ。確か名前は見澤灯」
「そうだね、灯さんもいなくなった。去年の暮れ急にいなくなって、それっきり。彼女は同級生だったから、僕も心配してるんだけど」
「どうして他の学生の話は報道されていないんだろう」
「規制されてるんだよ、たぶんね」
間延びした人柄の割りに、きっぱりと言うな。
讃神学園は政界に太いパイプを持った有名私立学校だ。失踪なんていうスキャンダルに神経質になってもおかしくはない。
「失踪者はどうなったんだ」
「まだ誰も見つかっていなかったと思う」
「見澤って子も？」
「うん。もう４ヶ月くらいになるのかな。だからちょっとしたミステリーなんだよね」
「どういうことだよ」
「たぶん失踪なんてできるはずがないんだ。だってここは島なんだから」
「つまり、島から出た形跡がない？」
「そう。島から出るには定期便を使うしかないのに、灯さんが船に乗った記録がない。彼女を船で見た人もいない」

「定期便以外で出た可能性は？　私的な船がこの島を訪れることはないのか？」
「たぶん、少なくとも灯さんがいなくなってからはないよ」
「なら、見澤はまだこの島に残っていることになる」
「たぶん、そういうことになるね。だけど４ヶ月にもわたって誰にも見つかっていない。島に潜んでいるとして、考えられる？　食事や睡眠はどこでとっているの？」
だからミステリーか。
「とすれば協力者がいると見るのが合理的だな。誰かが見澤をかくまっているんだろう」
「そうなるよね。だからみんなもそう思ってる。だからクラス間の空気もちょっと疑心暗鬼なんだよね」
「実際にかくまうような人間は？　見澤と仲の良かった友達とか」
「何人か調べられたよ。先生から話を――クラスのみんなは事情聴取だって言ってたけど――聞かれたし、寮も調べられた。だけど手がかりはなし」
「かなり上手くやってるんじゃないか？」
「そうかな。そうかもしれないけど、たぶん、難しいと思うんだよね。なんせ閉鎖的な島だから」
「そうか。だったら島外の人間が、失踪の手引きをしたってことは？　彼女と仲のいい部外者が、定期便以外の方法で島外へ連れ出す」
「考えられなくはないけど、でも誰が？　僕らは普段島から出ることなんてないんだよ」
「当然、見澤の家族にも連絡がないんだよな」
「たぶんね」
……それが失踪だからな。
だが、彼女が何か島で不都合な状況にさらされていたとしたら？
そして家族に助けを求め、学園に連れ戻されることを恐れた家族は彼女をかくまう――
ないな。学園に戻りたくないなら退学すれば言いだけの話だ。わ

ざわざ家族がかくまう必要はない。
だが、他の部外者の協力者がいるという可能性は捨てきれないな。島内に留まっている可能性を含め、彼女の交友関係を確かめておく必要がありそうだ。
「見澤と一番仲の良かった友人は？」
「会いたいの？　……やけにこの事件に興味があるんだね」
確かに不自然なくらい興味を持っているように見えるだろうな。
「推理小説とかが好きなんだ。俺の灰色の脳細胞を駆使してみたくてしょうがないんだよ」
「……ふーん。だったら、灯さんの失踪について、ちょっと調べてみる？　ただ、もうずいぶん時間が経ってるから、たぶん手がかりなんかもあんまり残ってないと思うけど」
「ああ、でも京一に迷惑かけるつもりはない」
「いいよ。灯さんのことは僕も気になってたからね。できるだけのことは協力する」
ありがたいな。まだ京一を全面的に信頼するつもりはないが、いい奴なのは確からしい。
「たぶん、一番仲良かったのは住吉穂乃歌さんかな。いつも一緒にいたから。蒼輔も黄組になれればいいんだけどね」
「どうしてだ？」
「僕も穂乃歌さんも灯さんも、黄組だったからだよ」
なるほどな。
「ま、明日にでも住吉さんには会わせてあげるよー。ついでに学園内の案内も出来るし。今日は疲れてるだろうから、じっくり休みなよ」
「そうだな。とりあえず一休みするか。……門限があるんだったか？」
「最近決められて、9時。でも、たぶんそんなに気にしなくてもいいよー。形だけのものだから」
「そうなのか？」

「過ぎたからって締め出すわけには行かないし、ほら、うちの管理人さんはああいう人だから」
確かにあのばあさんが説教するところは想像できないな。
「いや、まあ、寮長としてそういうこと言うのはどうかと思うんだけどー」
「なに、見物を兼ねてちょっと散歩でもしようかと思っただけなんだ。9時だな。覚えておくよ」――――

――――飯も食ったし、少しは疲れもとれたな。
静かだな。昼も静かだったが、夜の林の中の静けさってのはちょっと不気味だ。
月がでている。月明かりで、いい感じにほの明るい。
やれやれ、これで首尾よく明日から見澤灯探しが始まるわけだ。
あの神田京一ってやつはいいやつそうだな。知り合えてよかった。見澤探しにも協力してくれそうだし。幸先いいな。
……さて、少し歩くか。

## 第五話：廃校舎

林、林、林、か。
さすがに元無人島。何もない。
しばらく歩いているのに誰にも出会わないのは、もう夜だからだろうか。
まだ春休みだし、まだ実家に帰省している生徒が多いのかも知れない。
あまりにも何もないせいでここがどこかわからなくなりそうなものだが、あちこちに道案内の看板が立てかけてあるおかげで、迷う心配だけは全くない。さすがに島全部が学園なだけはある。
ちょうどいい月夜だ。
少しでも地形を把握するため、と思ったが、気持ちのいい散策になったな。
ん？
大きな建物だ。こりゃどうも校舎だな。
やけに老朽化してやがる。
おいおい、こんなところで授業受けるのか？　勘弁してくれよ。
と思ったら、看板がある。
……なになに。
老朽化により使用中止。危険、立ち入り禁止。か。
つまりこいつは、いわゆる旧校舎ってやつだな。
さすがにこんなとこで授業受ける必要はないということか。やれやれ。
ん？
今何か影が通りすぎたようだな。
校内だったみたいだが。
……月夜に、旧校舎に、怪しい影。
こりゃ、どう考えても、アレだよなあ。

別に怖くはないが、ほんとのほんとに怖いとかそういうんじゃないが、うん、君子危うきに近寄らずという先人のありがたい教えもあることだ。勘違いしないでもらいたいのは、決して臆病心にふかれたとか肝の小さい男とかいうわけではなくわざわざ不可解なものに近寄る必要は全くないということでうんたらかんたら――

――？

……今、何か聞こえたな。

ポルターガイストとか、そういう類のもんじゃない。

……聞こえないな。気のせいか？

！

やっぱり、何か聞こえる。

……人間の声だ。

途切れ途切れで、聞こえづらいが、これは確かに人の声だ。

……くそ、なんて言ってるのかまではわからない。

だが、切迫感があるのはわかる。

やれやれ、勘弁しろよ。

なんだって今日はいろんなことに巻き込まれちまうんだ。

見て見ぬ振り、ならぬ聞いて聞かぬ振りしたいところだ。でも、そんなことしたら寝覚めが悪いんだろうなあ。

……ちくしょう。行くか。

よっと、この程度の門、乗り越えるのは楽勝だ。

……また、声がしなくなったな。

ちくしょう、これで校舎の中で男女がプロレスごっこしてたら泣くぞ。

……暗い、が、月明かりのおかげでなんとかなりそうだ。

さび付いた壁に、埃だらけの床。やはりここは廃校舎なんだな。なにより、人がいたっていう感覚が全くない。普通建物には、気配とか、霊魂とか、そういう類のもんが染み付いてるもんだ。

……音はどうやら、この教室のほうから聞こえてくるみたいだ。かろうじて読める限りでは、音楽室のようだな。

ドアを少しだけ開けて中を覗いてみよう。ガタ、おっと、少し音がしちまった。だがこのくらいなら聞こえてないはずだ。
……中にいるのは三人……が輪になって、何かを囲んでいるようだ。三人とも背中を向けていて、顔はわからない。見た印象では、全員男――男子学生のようだ。
机や椅子なんかは取っ払っちまって、中はだいぶ広い。
――なにを囲んでいるんだ？　ん？
「これに懲りたら、次はちゃんと金を用意しておくんだな。今度はこのくらいじゃ済まないぞ」
正面の男が、何かを何度も蹴り上げているようだ。
なんだ――うめき声？！
どうやら、囲んでいる中にいるのは、人間のようだな。
さっきのせりふから推測すると、かつあげ、つまり恐喝ってやつか。
勘弁しろよ。全く、いけ好かないやろうがいるもんだ。
ちっ、三人か。面倒に巻き込まれるのは勘弁だが、ここまできたら仕方ない。
ガラッと、今度は大きく音を立ててドアを開ける。よしよし、連中びっくりしやがったみたいだ。
「おいおい、ここは廃校舎だって書いてあったのに、どういうことだ。てめえら一体何の授業してやがる」
「誰だよてめえは」
「正義の味方だ。がらじゃねえけどな」
しーん。ありゃ、ちょっと外した？
「一応聞いとくが、お前らみんな仲良しこよしでじゃれあってたってわけじゃないんだろう？　そこに誰かいるみたいだけど、ちょっと見せてくれないか？」
三人は無言で、少し距離を置きながら俺を囲む体制に入った。うろたえもしない。なかなか度胸のあるやつらだ。
隙間ができたので、蹴られていた対象が見えるようになる。暗く

てよく見えないが、やはり人間……うずくまった人間のようだ。
やつらは緊張して、今にも飛びかかってきそうなのがわかる。
「お前らさあ、やるにしても、もうちょっと、ちゃんと確認しといたほうがいいんじゃないか？　俺がお前らの仲間だったらどうすんだ？」
「やかましい！」
正面のやつだ。
「見られたからにゃ、そのままにしとくわけにはいかねえ」
「こりゃいい。明らかに悪役のせりふだ。どうする気だ？　まさか縛って沈めるわけじゃないんだろ？」
「怖くて、しゃべれないようにしてやるさ」
かつあげされてたやつも、そうやって恐怖で縛り上げて、金を巻き上げてたんだろう。
「お前らさあ――おっと」
しゃべってる最中に殴りかかってくるのは、反則じゃないのか？
「お前らさあ――自分たちの名前を知ってるか？　お前らみたいなのを人間の屑って言うんだぜ」
返答もなく、ただひたすらに殴りかかってくる。ただ、あまり連携がとれていないせいで、大した脅威じゃない。
タイミングが合ったところで、右ストレートをお見舞いしてやる。
や。
……手加減はしたが、もう立ち上がれないはずだ。
「おい、なにやってる。おい」
たった一撃で床に倒れこんだ仲間に、別のやつが呼びかける。
その隙に一気に間合いをつめ、掌底を繰り出す。
――気を失わないながらも、意識がぼんやりしちまうはずだ。
「な、なにやってんだ。おい、おい」
残ったやつは、もう余裕がなくなってきたみたいだ。やれやれ、多少は慣れたやつらだったみたいだが、所詮は素人、か。助かった。
「どうする？　まだやるのか？」

「ち、くしょう！　お前はなんなんだよ」
「言ったろ？　正義の味方だ」
しーん。ま、拍手を期待してたわけじゃないけど。
「面倒だから、もうどっか行けよ。安心しろ、後ろから襲い掛かったりしないから」
少し躊躇っているな。もう少し待つ。よし、警戒しながらも、仲間を介抱して、ちゃんと逃走するようだ。
……行ったか。
全く、勘弁しろよな。ほんと、勘弁しろよ。今日の運勢、最悪なんじゃないか？
「大丈夫か。だいぶ、手ひどくやられたみたいじゃないか」
髪は乱れ、服も乱雑に跳ね飛ばされ、何より、体中が痛むんだろう、ぼろ雑巾のように横たわりながら、必死で体を縮めている。月明かりの中、恐怖で、小刻みに震えているのがわかる。
「どうだ？　立てるか？　いつまでもそんなとこに寝そべったままじゃ、治るもんも治らないからな」
……どうやら、傷はたいしたことはないらしい。顔には大きな青あざがいくつもできているし、おそらく服の中も同じ様子なんだろうが、骨折や大きな切り傷なんかは見られないようだ。
「これなら、二三日安静にしてたらすぐ良くなるさ。ほら、いい加減起き上がれよ。……よし、寮はどこなんだ？　実は、俺、自慢じゃないが、今日初めて島に来たから、島内の地図が全くわからん」
どうも、梨のつぶてだ。もう少し会話のキャッチボールをしようぜ。
体の傷はともかく、精神的に参ってるんだろう。
外に出て、どこに行けばわからないので、なんとなく足に任せて歩く。月明かりで、木々や地面や空は青白く輝いていた。
「あいつらの名前は知ってるのか？　どうする？　訴え出るなら証言してやってもいいぞ。このままじゃ、君も仕返しが怖いだろ？
そういえば、自己紹介がまだだったな。なんか今日は自己紹介して

ばっかだ」
　まだ返答はないが、少しは表情が和らいできたみたいだ。
「俺は吾川蒼輔。高等部二年だ。転入生なんで、見ての通り、バッジは無し。バッジでクラスを判別できるなんて、変わった学校だよな。君は……月でよくわからないな。赤か？　なんだ、優秀なんだな。優秀なんだろ、赤組って？」
「赤がなんだっていうんだ！　赤なんかに入らなければよかったんだ」
　ようやく口を開いたかと思えば、吐き捨てるような口調だ。
「さっきのやつらも、赤組か？」
「……」
　やれやれ、また沈黙か。
「ま、やつらのことはどうでもいいさ。あんなやつらは無視しといて、君はさっさと怪我治して、元気に学生生活送らないとな。新学期では、クラス替えがあるんだろ？」
　けど、クラス替えがあっても、やつらと離れられるとは限らない、か。
「俺もなるべく力になるよ。さっき見ての通り、俺暴力には自信があるんだ。って、そんなもんマジで自慢にはならないけどな」
　やれやれ、いつからこんなおせっかいになったんだ？
「それに、緑組のやつと黄組のやつに知り合いがいるから、もし君がそいつらと同じクラスになったら、よろしく言っとく。ま、だから気楽にやることだよ。寮はどこなんだ？　たまに様子見に行く」
「いいよ。そんなことまでしてくれなくて」
　全くだ。だけど、少しは心を許してきたみたいだな。
「ちなみに、俺のことは蒼輔でいいぞ。島に来て会ったやつがフランクなやつばかりだったから、もうそれで通そうかと思ってんだ。……変かな？」
「……変じゃない」
「じゃ、俺は君のことはなんと呼べばいい？　今ならお兄さん、リ

クエストに応えちゃうぞ？　ああでも、ダーリンとかマイハニーとかは勘弁な。そっちの趣味はないんだ」
　お、よし、少し笑ったみたいだ。
「どうした？　急に立ち止まって」
「ありがとう。でももうここまでいいよ」
　過剰な親切は返って迷惑、か。
「わかった。でも二三日安静にしてろよ。あと、あいつらのことは気にすんな。ああいうのは、あっちがどうかしてるんだ」
「うん。僕もそう思う。ありがとう」
「よし、少しは顔色がよくなったみたいだな。じゃあな。ああちょっと待てよ。結局君の名前はなんなんだ？」
「……清澄利春。なんと呼んでくれても構わないよ」
「じゃ、気軽にマイラバーとでも呼ぼうか」
「……」
「普通に利春、でいいよな。じゃあな利春」
「うん。ほんとにありがとう……蒼輔君」

## 第六話：朝

……なんだかうるさいな。
……見慣れない部屋だ。ここはどこだ？
ああ、そうか、昨日から讃神島へやってきてたんだった。
室内は少しひんやりする。殺風景だ。まだ、荷物もなにもないからな。床に敷かれた布団だけが、この部屋の持ち物だ。
……なんだよ、うるさいな。どこが鳴ってるんだ？
ドアのほうだ。誰かがドアを叩いている。
今何時だよ。……１０時だ。こりゃ、起きてない自分が悪いな。
「誰だよ」
蒼輔はドアを開ける。
「おはよう、蒼輔」
「京一か」
「もしかして、まだ寝てた？」
「まさか。朝も１０時間過ぎてるって言うのに、寝ていたわけがないだろう」
「寝癖。それに、たぶん声が寝起きだよ」
……やるな。
「なんでドア叩くんだよ。チャイムがあるだろ？」
「ないよ。残念ながら」
ないのかよ。やれやれ、勘弁してくれよ。
「たぶん１０時には迎えに行くって、約束したはずだけど、忘れてた？」
「いや、わかってたよ。ただ、目覚ましを持ってくるのを忘れちまったんだ」
「そっか。初日だから仕方ないかもね。よく寝れた？」
「ああ、全面フローリングに暖房設備はなし、おまけに隙間風がびゅんびゅん吹くおかげでよく寝られたよ。全く、大した高級住宅だ」

「でも、入寮するのに荷物もないなんて、ちょっと用意が足りないんじゃない？」
「そのうち届くだろうさ。寝起きができれば、俺はそれでいい」
「豪胆なのかずぼらなのか……」
京一はちょっと呆れてるみたいだ。
「朝ごはんはどうする？　食堂に行けば食べられるけど……もう時間過ぎちゃったかな。パンなんかなら購買で売ってるけど」
「いいよ。このあと予定があるんだし」
「もうすぐお昼の時間になるしね。教室を案内する予定だったけど、先に食事にしようか」
「ちょっと待っててくれ。すぐ支度する」
京一を待たせて、部屋の中に入る。
と言っても、顔を洗って着替えるくらいのもんなんだけどな。
「お待たせ。それじゃ行くか」
寮を出ると、新鮮な空気が肺の中に入ってくる。今日は晴れか。
「今日はどこに行くんだ？」
「第三講義部。授業が行われる教室とか、体育館とかがあるところだよ。僕らの普段の生活の中心部になるところだね。特に運動組とか芸術組は別のところで活動することも多いんだけど、普通組の生活は大体そこになる」
「部っていうのが、一まとまりの大きい単位を表すんだな」
「そう。講義棟や体育館、運動場、その他講義棟を中心として学生生活に必要な施設が集まった場所を総称して高等部第三講義部。第三は黄色組だけが入っているから、黄色学校なんていう言い方もされるけどね」
「つまり、同じような講義部があと三つあるってわけか」
「そう。第一から数えて、赤組、青組、黄組、緑組の講義部。だから、クラスが変わったら実際に生活の場所まで変わるから、案外大変なんだよね」
「講義部、というか学校以外の施設もあるんだろう？」

「うん。音楽室とか美術室ばっかり集まった場所とか、陸上競技場とか大きなグラウンドなんかが集まった場所があるよ」
「そういう施設があることが、讃神学園の最大の特色か」
「そうかもね。特に競技場なんかは、ここでオリンピック開けるんじゃないかってぐらい」
国内有数の選手を輩出している秘密も、その練習設備の豊かさにある。
「でも、普通の講義部もいいところだよ。広くてゆったりしてるし、特に黄色や緑学校は比較的新しい施設だから綺麗だし」
「てことは、赤や青の建物は古いのか」
「あー、そうでもないな。そういや最近改修されたって言ってたから。学園内の施設で、昔の色を残しているのはこの寮くらいだよ」
「……てことは他の寮は綺麗なのか」
「ここも改修の要望は出してるはずなんだけどね、たぶん」
やれやれ。
「とにかく今日は今から第三講義部、――黄色学校へ向かうわけだ」
「うん、僕も穂乃歌さんも一番勝手知ったる場所だからね。蒼輔君も黄組になれば、今日の案内が無駄にならなくて済むんだけど」
「学園内はバスが出てるんじゃないのか？」
「休暇中はあんまり本数がないから。黄色なら、たぶん歩いてもそんなに遠くないよ」
のんびりしたやつだな。
でも、島の風景を記憶できていいか。
……お、こりゃなんだか古びた建物だぞ。
これは――
「廃校舎か」
「ああ、そういえばそんなものがあったねえ」
「ここは何の施設だったんだ？」
「いや、知らないなあ。僕がこの学園に入ったときから、ずっとこんな感じだからね」

「赤とか青の講義部だったってわけじゃないのか」
「うーん、場所が移動したって話は聞かないけどな」
これも過去の遺物ってわけか。だったらさっさと撤去しろよ。
春眠暁を覚えずとはよく言ったもので、春の暖かい空気だ。
道の脇をたんぽぽが咲いている。
しっかし、道を舗装する予算はなかったのかよ。でこぼこが激しくて歩きづらい。ほんと、勘弁してくれよ。

「京一、失踪事件について、もう少し詳しく教えてくれないか？」
「そう、それなんだけど、ちょっと考えてみたんだけどさ」
ちょっと改まった口調だ。
「灯さんのことが雑誌に載ってたってのは、本当？」
「どうしてそんなことを聞くんだ？」
「他の失踪が外部に漏れてないのに、灯さんだけ載るのはなんか変じゃないかなと思って」
「ふむ。でも実際俺が知ってたんだから、それ以外考えられないだろ？」
「考えられるよ。例えば……蒼輔が、灯さんの家族の知り合いだったとか」
「なるほどな。知り合いが讃神学校に転入するのをこれ幸いと、自分の子供の捜索を頼んだわけだ」
「たぶん、ありえないって話じゃないよね」
「残念ながら、俺の言ってることは本当だよ。確かにどっかの雑誌で見たんだ。なんなら探してやってもいい」
「いや、ごめん。疑うつもりじゃなかったんだけど、気を悪くしたよね」
ちょっと、慌てた様子だ。
……いいやつなんだな。
「全然。政府高官と知り合いなんなら、俺の人生ももうちょっとば

ら色になるんだろうけどな」
「政府高官？」
「見澤灯の両親だ。……そうだ、そう雑誌に書いてあったんだな」
「知らなかったなあ」
「そうか、だから見澤の失踪だけが取り上げられたんだ」
「なるほど。政府高官の子供が失踪したとなれば、一級品のスキャンダルだね」
「だから見澤だけが記事になり、他の失踪は無視された」
「話のつじつまは合うね、たぶん」
「しかし、讃神学園ってのはエリートの子女も通ってるんだな」
「うーん、灯さんの家がそんな家庭だったとは知らなかったな。ただ、ここはいろんな人がいるからね。僕みたいな、平凡な家庭の凡人もたくさんいる」
「そんなことを言えば、俺も一緒だよ。首尾よく見澤を見つけ出したら、謝礼でもせしめとくか」
「いいね。将来就職先を世話してもらえるかもしれないなあ」
現実的なこと言うなよ。
「見澤灯以外の、失踪した人間についてもう少し教えてくれないか？」
「うーん、僕も詳しくは知らないからなあ。知っている範囲でよければ」
「今のところ、何人の生徒がいなくなったんだ？」
「灯さんを入れて、六・七人くらいだと思う、たぶん」
「失踪時期は？」
「バラバラ。同時にいなくなったって人はたぶんいなかったと思うよ。最初の人がいなくなって、ちょっと生徒の間でも動揺があってさ。それで落ち着いてきたかな、って時にまた次の人。しばらくしてまた次の人。その繰り返しだよ」
「全員共謀していなくなったっ可能性は？」
「どうかな。いなくなった人は学年もクラスもバラバラだったと思

うよ、たぶん。灯さんにしても、他の失踪した生徒とつながりがあったとは思えないし」
「失踪者全員に共通するようなことは？」
「わからない。いろいろ考えられてはいたみたいだけど、特にめぼしいものはなかったんじゃないかと思う」
「全員、まだ見つかってないんだよな」
「うん」
「そして全員、島から出た形跡もない？」
「そうらしいね。島から出るには定期便を使うしかないのに、誰も使った様子がない」
「ということは、全員まだ島内にいると考えたほうがいいんだろうな」
「でも、それもかなり難しいよね」
「可能性の問題さ。島は確かに広くはないが、七人が隠れられないほどじゃない。見ての通り林も多く残っているんだ。隠れる場所ならいくらでもある」
そう、隠れる場所はある。
例えばあの廃校舎はどうだ？　きちんと捜索すれば、何か出てくるかもしれない。あの廃校舎以外にも、似たような場所はあるんじゃないのか？
「でも、隠れおおせたとして、それからどうやって生活するの？最初の人だともう一年近くになるんだよ」
京一の言うとおりだ。食事や着替えの問題がある。
「協力者がいると考えれば、何とかなるかも知れないな」
「学生には無理だよ。だとしたら疑うべきは……先生たち？」
「いや、学生に無理と決め付けるのは早計だな。一人では無理でも、大勢でやれば出来るかも知れない」
「うーん……」
「そう考え込むなよ。俺だって言ってることが不可能に近いことはわかってる。でも探し出すつもりなら、頭を柔軟にしておかなくち

ゃいけない」
「それに、灯さんの場合はもう一つ不可解な点があるんだけどね」
「なんだよ」
「それはまた後で言うよー。……灯さん、探し出せるといいけどな」
……そうだ。早く探し当てないといけない。
ここでいうべきことじゃないが、失踪者の生活の問題を一掃してしまえる解答がある。
失踪者がもう死んでしまっているという解答だ。死んでしまっているなら、食事も住居も必要ない。
そんな展開は勘弁願いたいが、もしそうだった場合、この孤島には大量殺人者が潜んでいるってことになっちまう。
どうやら捜索はかなり本腰入れてやらなきゃならなくなってきたな。できるだけ早く見澤灯の行方を突き止めなくちゃならない。そんで殺人鬼がいるなんて疑い、さっさと払拭しちまいたいところだ。

「お、なんか建物が見えてきたな」
「ああ、あれが黄色学校だよ」
「住吉穂乃歌って子はどこにいるんだ？」
と蒼輔が京一のほうを向こうとした瞬間――
「吾川蒼輔って、君だねっ」
手に銃を持った女の子に声をかけられた。
「うーんとっ、動くな」

## 第七話：親友

長い髪をまとめて後ろから一本下げている。大きい瞳がニコニコしていて、彼女の明るい性格を感じさせる。
何故だか知らないがジャージ姿だ。しかも明らかにサイズが大きすぎる。本来襟につけるべきバッジを、この子の場合は肩口につけているみたいだ。
手にはこっちに向けられた銃。
「やれやれ、本当に物騒な学園だな」
「ほらほらっ、手を挙げな」
どう見ても目が本気じゃないんだよな。趣味の悪い悪戯だ。
ん、視線がちらちらしてんな。
……俺の後ろ――にいるのは、京一か。
とすれば……。
「これでいいか、住吉穂乃歌」
いきなり名前を言ってやる。
……よし、さすがにびっくりしたか。
「えっ、何であたしの名前知ってるの？」
やれやれ、当たりか。
「俺はベイカー街に住む天才探偵だからな」
ありゃ、きょとんとしてる。
「解答編の前に、物騒なもんは降ろしてもらいたいんだけど」
「ああ、これ？」
穂乃歌は俺から的を外して、空に向ける。
引き金を引いた。空気の弾ける鋭い音が響いた。うるさいな、こりゃ。
「偽物だよ」
「だからって、銃口を向けられていい気はしないな」
「ふぅん、意外と小心なんだね」

「意外も何も、初対面だろ？」
「そうっ。なのにあたしの名前がわかったのはどうして？」
「まず確認しておきたいんだけど、君が俺が今日会う予定だった住吉穂乃歌ってことで間違いないんだな」
「うんっ、住吉穂乃歌。穂乃歌でいいよ。そっちは吾川蒼輔だねっ」
握手か。
応じる。
「よろしくねっ、蒼輔」
やっぱりフランクなやつが多い学校だ。
「簡単だよ。まず、君は俺の名前を知っていた。昨日島に初めてやって来た俺の名前を知っている者は限られている。おそらく住吉穂乃歌は昨日京一から俺の名前を聞いていただろう。君は肩につけたバッジから同学年の黄組だ。もっといえば、京一の同級生だ」
「うん。そうだよ」
「キョロキョロしてる様子から考えて、京一の知り合いなのは間違いなかった。さらに、君の悪戯っぽい表情。視線は何かの合図をしてるんだと思った。おそらく、『何も言うな』だろう」
お、ちょっと照れたような表情だ。
「また、君はわざわざ俺を待ち伏せして悪戯を仕掛けた。ということは俺がこの時間ここを通ることを知っていなければならない。そうした全ての条件に当てはまるのは、俺と今日会う予定になっている住吉穂乃歌しかいない。ってわけだ。だな、京一」
「ご名答、だね。でも勘違いしないでほしいんだけど、僕はこんな悪戯のこと知らなかったんだよ」
「でも、ちゃんと黙ってたじゃないか」
「僕だってそのくらいの空気は読まないとねー」
やれやれ。
「で、この悪戯の理由はなんなんだ？」
「有名な、吾川蒼輔がどんなものなのか、試してみたかったんだ」
勘弁しろよ。有名になった覚えはないぞ。

「何の話だ？」
「昨日、定期便の中で赤と青に勝ったんだって？」
昨日の喧嘩の話か。
「俺は喧嘩の仲裁をしただけだよ」
「でも投げ飛ばしたんでしょうっ。それってすごいよ」
そうなのか？
京一もうなずいてるな。
「そーだね。筆ならともかく、本や靴が相手なら、すごいことだと思うよ」
筆とか本ってのはバッジによるクラスの傾向だな。筆が芸術組、本が一般組、靴が運動組だっけか。
「そんなに違うのか？」
「赤と青は基本的にトップクラスしか入れないからね。特に靴の赤や青なら、何かの種目の全国クラスの人間しかいないよ。そんな人間に喧嘩で勝つってのは、やっぱりすごいと思う」
「赤のほうが青よりも上だって聞いたけど？」
「一応ね。でも青にも怪物みたいなのはうようよしてるよ。僕ら凡人からしたら、どちらにせよ雲の上の存在だよ、たぶん」
「入れ替えがあるって聞いたけど、案外格差があるんだな」
「黄や緑から赤・青に行く人間もいるけど、すぐ帰ってくる子のほうが多いよ。逆に赤・青から黄・緑に来た人間は、すぐ戻っていく」
要するに、黄と青の間には超え難い壁があるわけだな。
「だから、蒼輔が赤や青に勝ったっていうのが本当なら、すごいことだと思う、たぶん」
「やめろよ、まぐれだよまぐれ」
それより、ちょっと気になることがあるな。
「どうして穂乃歌が昨日のことを知ってたんだ？」
「船での乱闘のことっ？　ルームメイトに教えてもらったんだ」
「ルームメイト……まさか、朱姫か？」
「ふぅん、もう名前で呼ぶ仲なんだ、朱姫と。朱姫も蒼輔って呼ん

でたなあ」
　なんだよその顔は。
「名前で呼ぶってんなら、穂乃歌だってそうだろ。京一だってそうだ。そういう親密な関係ってのは苦手なんだが、仕方ないからここではそうすることにするよ」
「へぇっ。ま、京一から吾川蒼輔って人の話を聞いた後に、朱姫から同じ名前の人の話を聞いた。だからどんな人だか、ちょっと興味が出てきたんだ」
「それで模擬銃かよ」
「いいでしょうこれ。結構精巧に出来てるんだよっ」
「ミリオタか？」
「いやっ、人から貰ったもの」
　誰がそんなもの贈るんだよ。
「で、試してどうだった？　やっぱりただの凡人だっただろ？」
「どうかなあ。模擬銃とはいえ、いきなり凶器を突きつけられても平然としてるなんて、結構やると思うけど？」
「褒めるなよ。勘違いしちまう」
　やれやれ、勘弁しろよ。
「じゃっ、いい加減こんなところで立ち話もなんだから、構内に入ろっか」

　ふむ、ここら辺からは道もしっかり舗装されてきているな。
　植林で、構内がしっかりと形づくられているようだ。
　なるほど、ここが黄色学校というわけだ。さすがに校門まではないが。
「あの建物が、クラスの教室が入ってる建物。僕らは基本的にあそこで過ごしてるわけだね」
「向かい合ったこっちは？」
「音楽室とか、科学室とか、専門的な授業を行う教室が入ってる。

移動教室の際はあっちに行くわけだねー」
「で、あっちが運動場に体育館。あっ、蒼輔は初めて来たんだよね。ちょっと見とく？」
「なるほどな。確かに一個の学校がここにあるわけだ」
「あっちが図書室。向こうにプールもあるよ。今いる、教棟と教棟のこのスペースはちょっとした中庭だね。昼休みなんかにここで遊んでる子達がいるんだ」
　これが第三講義部。通称黄色学校、か。
「で、これからどうするんだ？」
「食堂でも行こうか。たぶんもうお昼の時間だし」
　そういや、俺はまだ朝飯も食ってないんだったよな。
　時刻は……もう昼前か。
　ふむ、食堂はこっちか。
「構内のレイアウトは、他の色も一緒なのか？」
「地形が違うからね。たぶん、配置は一緒じゃないと思うけど、あるものは一緒だよ」
「でもさっ、赤と青には休憩室とか、トレーニングルームとか、なんか高級そうな部屋がいくつもあるって聞いたけど？」
「クラスで格差があるわけだ」
　ああ、ここが食堂か。綺麗な建物だな。中もさっぱりしている。あっちが調理場で、カウンターでこっちと仕切られている。
「ここでメニューを頼めば、作ってくれるから。……あ、日替わり定食をー。で、作られた料理を持って、向こうの好きなテーブルで食べる」
「空いてるな」
　当たり前か。今は春休みだ。
「でもっ、昼休みはいつもわやくちゃ状態になるんだよね。……おばちゃん、あたし親子丼っ。ここに黄色のみんなが食べにくるから」
「……カレーを頼みます。昼休みに満席になったらどうなるんだ？」
「ここで昼食をとる以外にも、購買で買うか、弁当を持ってくるか

があるからね。混むけど満席になることは少ないよ、たぶん。――どうも。じゃ、先に席取っとくね」
「寮なのに弁当？」
「寮母さんに作ってもらうか、自炊。寮にも台所があって、言えば貸してもらえるんだよっ。――どもですっ」
カレーと親子丼は同時に出てきた。早いな。
京一は……あそこか。窓際だ。ここなら風景が見えるな。
「ふたりは他の色になったことはないのか？」
「僕は一回だけ赤があるな」
「あたしはひと学期だけ緑があるよっ」
緑か。
「あっ、何だその目。言っとくけど、緑ではトップクラスの成績だったんだよ」
緑では、かよ。
「わかってるよ。成績でクラスが決まるが、成績が全てじゃない、だろう？　クラスの色で人を判断することはないさ」
「蒼輔のクラスは決まってないの？」
「まだ聞いてない。一度教員に会っておかなきゃならないから、そこで教えてもらえるんじゃないかと思う。後で行くよ」
「じゃ、この後職員部に案内するねー」
「京一は赤になったことがあるんだな。どんなクラスだ？」
「うーん、雰囲気悪かったよ。すごくギスギスしてて、人に勝つことばかり気にしてる感じだった。正直、黄に戻れたときはほっとしたもん」
「エリート教育ってのはいいことばかりじゃないもんだな」
「その中でも、会長はいい人だったな」
会長？
「生徒会の会長だよ。赤組でもみんなから一目置かれる存在だった。勉強も運動もトップクラス。それに僕みたいなはぐれ者にもよく声をかけてくれたし」

ここでもまた会長かよ。
「完璧超人かよ。いけ好かないな」
「そうかなー。僕は赤組に会長がいてくれて助かったけどなあ」
生徒に人望のある生徒会長、か。後で会うことになるかも知れないな。
「そろそろ本題に入ろう」
穂乃歌の顔が、ちょっと強張った。
京一が黙ってうなずいた。穂乃歌に言葉を促したんだろう。
「……うんっ。灯の失踪のことだったね」
そう、それが本題だ。
俺は、失踪した見澤灯の居場所を突き止めなければならない。
「穂乃歌は見澤灯の友達だったんだって？」
「友達じゃないよ。……親友だった」
「そんなに仲がよかったのか」
「いつも一緒だったとは言わないよ。でも……灯とはなんか、波長が合ったんだ。しゃべるときの呼吸とか、なんでもないしぐさとか。隣にいてすごく居心地がよかった。灯とは多分これからもずっと親友でいるんだろうなって、なんだか知らないけど無条件で思えたよ。だから……困ったことがあったら相談したし、相談された」
親友、か。
俺にはよくわからない感情だ。
「いつからの付き合いなんだ？」
「中学一年。灯もあたしも、中一から讃神島にいるんだ。讃神島に来て、やっぱり家族と離れて暮らすから、最初の頃はさびしかったけど……、灯は同じ境遇だったし、だからなんか自然に仲良くなっていったな」
「見澤のことなら何でもわかる？」
「そうは言わないよ。言わないし、言えないよね。わかってたら、とっくに灯を見つけられてる」
「見澤が失踪したのはいつごろなんだ？」

「去年の年末。１２月……クリスマス・イブだったかな」
「穂乃歌のほかに、見澤の仲のよかった人間は？　特に男で」
「つまりっ、灯が駆け落ちしたんじゃないかってこと？」
「イブに失踪したなら疑って当然だろ？」
「でもっ、駆け落ちなら一緒にいなくなった男が必要じゃない？」
「後から男が追っかけるのかも知れない。その逆もある。いずれにせよ、可能性は全部疑ってかかるべきだ」
「うーん、それは……。……付き合ってた人はいなかったよ。ついでに言えば、２４日は冬休み初日だったよ」
「男じゃなくても、彼女の仲のよかった人間は？」
「あたしが一番だったと思うけど……それはわからないか。後で何人か教えてあげるね」
　さて、そろそろ核心だ。
「見澤が失踪した理由に、心当たりはないのか？」
　やっぱり、こういうのは、親友として訊かれたくないことだろうな。多分既に何度も訊かれ、また自問してきたことだろう。
「……わからない」
「見澤が悩んでいた様子は？」
「クラスでは上手くやってたし、成績も悪くなかった。むしろ今回の期末はよく出来たって言ってた。……わからないよ」
「失踪の理由は、やっぱり人間関係の悩みをまず疑ってみるべきだと思う」
　特に、見澤はまだ子供だ。金銭トラブルに巻き込まれたというケースは考えづらい。
「クラス内じゃなくても、他クラスの生徒とか教師とか、もしくは家族はどうだ？」
「わからない。……そういう相談を受けたことはなかった。わからないよ。灯、いつもどおり楽しそうに過ごしてたのに」
　ここは孤島だ。閉鎖環境で生活しているんだから、人間関係は限られてくる。だからこそ、他人との関係がこじれれば逃げ出したく

なることもあるだろう。
だが、穂乃歌の話を聞く限りでは、失踪する理由は見当たりそうにないな。
ちっ、勘弁してほしいが、何かの犯罪に巻き込まれたってケースのほうが濃厚になってきやがった。――見澤灯を無事に見つけられればいいが。

「どうする蒼輔。たぶん、そろそろ教員部に行く？」
「あっ、あたし今日は予定ないから、まだ大丈夫だけど」
「いや、とりあえず事件のことは中断しよう。悪いな、こっちの用で」
「ううん。じゃ、案内もかねてあたしも行くよ」
やれやれ、いいやつばかりだ。
ん？　なんかこっちに来るやつがいるぞ。
めがねをかけた女子だ。……誰だ？
「あなたが吾川蒼輔ですか？」

## 第八話：生徒会

肩まで伸ばした髪は、軽くウェーブがかかっている。制服を折り目正しく着込み、汚れ一つない。几帳面な性格らしい。めがねの奥の目は目じりが釣りあがり、きつい。バッジの色は青。

それが、先頭の人間だ。後ろにふたり、同じようなのが並んでる。

「吾川蒼輔、に間違いないようですね」

「誰だ？」

「ふん。転校生のあなたが一体どうしてこのようなところにいるのですか？」

無視かよ。

「あんた、誰だよ。それに、どうして俺の名前を知ってるんだ？」

「現在あなたがこの黄色学校にいる理由はないと判断します。即刻自分の所属する寮に戻りなさい」

おいおい、勘弁しろよ。こいつ、喧嘩売ってんのか？

「まず、名乗れよ。そうじゃなきゃ、こっちだって会話のしようがないだろ」

「ふん。さすがにいい度胸をしていますね。いいでしょう。私は高木刃子。生徒会の人間です」

「生徒会か。じゃ、あんたが有名な生徒会長か？」

「私は会長ではありません。吾川蒼輔。転校生が、あまりうろちょろするのは感心しませんね」

生徒会ってのは、生徒指導も行うのか？

……っと、角を立てるのはよくないな。

「学園内を案内してもらってたんだよ。少しでも早く学園に馴染めるようにね」

「その必要はありません。学園の構造なら、学生生活を送るうちに自然と覚えられるでしょう」

「おいおい、せっかくこっちがやる気だしてんのに、水を差すのか

よ、生徒会ってのは」
ん？　なんか、京一と穂乃歌がやたらこっちをちらちら見てくるな。
多分、合図を送ってるんだな。……逆らうな、やり過ごせ、ってとこか。
「やる気をだすのは結構ですが、指示されていないことまでする必要はありません」
「じゃ、俺は何をするにも生徒会の許可を得なければいけないのか？」
「そうするのが望ましいですね」
「だったら息するのだってあんたらの許可が要るんだな。やれやれ、勘弁してくれよ」
「揚げ足を取るのはやめなさい」
「島内を見て回るくらい、別にいいだろ？」
「今、学園は非常に複雑な状態となっているのです。新参者が歩き回っていると、出遭わなくてもよいトラブルに遭わないとも限りません」
複雑な状態、か。
「クラス対立のことか？」
「ふん。お見通しというわけですね。そうでした。あなたは既に遭遇していたのでしたね」
渡島船でのことか。
「そうか、朱姫から生徒会に報告されてるんだな」
だから俺の名前も知っていたってわけだ。
「山輪朱姫から渡島船でのことは報告を受けています。まず、生徒同士の喧嘩を仲裁してもらったことについて、生徒会として礼を言いましょう。ありがとう」
やれやれ、全然感謝してもらってる気がしないな。
「彼らはどうなったんだ？」
「厳重注意と一週間の謹慎です」

どちらも大怪我したわけじゃないんだ。妥当なところか。
「俺の顔は、生徒名簿でも見たのか？」
「はい。優秀な転校生が来たということでしたので、確認しておきました」
「勘弁しろよ。俺は優秀なんかじゃないぜ」
「いえ。船での話を聞いた限りでは、あなたは十分、われわれと同じ青や赤に入る素質があると判断できます。ですから――」
こいつは京一と穂乃歌に視線を向けた。おいおい、この表情は……侮蔑？
「――このようなレベルの低いの人々と付き合うのは感心しませんね」
……ちっ、いちいち腹の立つやつだな。
こんなところで波風立てるのは勘弁だってのに、やれやれ、このままじゃ収まりがつかないな。
「人間にレベルの高いも低いもないだろ？」
「格差はあるのですよ。理知的で有能なわれわれと、われわれに支配されるべき低俗で無能な彼ら。朱に交われば――、という格言があります。われわれのような高等な人間は極力彼らのような卑賤な人間と付き合うべきではないのです」
「勘弁しろよ。……いちいち腹の立つ言い方しか出来ないのか？」
「ふん。あなたはまだ理解していないようですね。人間にはそれぞれ生まれついて持った階級いうものがあることを。そしてそれはその後の人生において決して乗り越えることができないものだということを」
「馬鹿なこと言うな。人間に階級があってたまるか」
「ふん。綺麗ごとですね。綺麗ごとで済ませられるほど、世の中甘くはないですよ？」
「人間には生まれついた才能の差があるのは知ってる。親だとか財産だとか、生まれついた条件も人それぞれ違う。そうだな、そんなことは知ってる。けど、人間に、人間という存在そのものに、それ

ぞれ階級なんてあるわけないだろう。少なくとも、誰と仲良くなったって悪いはずがない」
「やれやれ、見損ないました。いいえ、見誤りまったというべきでしょう。吾川蒼輔、あなたはわれわれと同じ世界の人間なのだと、勘違いしました。あなたもどうやらわれわれとは並ぶべくもない存在のようですね」
「俺だって、あんたらみたいなのと同じにされたくはないね」
ち、笑いやがった。どう見たって見下しているって笑いだ。
「好きにしなさい。しかし、我が讃神学園には、生徒自治というものが強い効力を発揮します。讃神学園にいる以上、生徒会には従ってもらいますよ」」
「脅しか？」
「忠告です。学園で平穏無事に暮らしていきたいのであれば、われわれに逆らうべきではないと申しておきましょう」
「わかった。わかったよ。いいからもう消えてくれ」
「吾川蒼輔、あなたはあくまでもわれわれを敵に回すというのですね」
ちぇ。敵視してきたのはそっちだろ？
「悪かったな。謝るよ。ごめんなさい。これでいいか？」
「なんと挑発的な！　……ふん、いいでしょう。せいぜい覚悟しておくことです」
「待て。折角だから、一つ聞かせてくれ」
「なんですか？」
「この島で頻発してるっていう、失踪について」
「なっ、一体どこでそのような話を……。そうか、あなたたちですね。そういったことは、新参者に話すことではないと思いますが」
わ、怖い目で京一と穂乃歌を睨んでやがる。
「どうせいつかは耳に入ってくることだったんだ。こいつらを責めるな」
「ふん。吾川蒼輔、そのような事件に首を突っ込むのは止めなさい」

「どうして？」
「興味本位で首を突っ込んでいいようなことではないと言っているのです。これは人の私的な領域に関わることであり、学校の名誉に関わることでもあります」
……どうした？　表情は変わっていないが、どこか違和感があるな。
微細な変化だが……。
……焦り？
「言ってることはわかるが、触れずに済ませておくことも出来ないだろう」
「触れていないわけではありません。しかしそういうことは警察に任せておくべき事態です」
「警察がどこまで信用できる？　現にまだ一人も見つかっていないんじゃないか」
「いずれにせよ、転入生であるあなたが関わるべき事件ではありません。これは生徒会としての命令です。学生は、学園生活に専念していればいいのです」
……やっぱり、こいつの態度はどこかおかしいな。言ってることは普通だが、表情や口調に、どこかしら違和感を感じる。
断定は危険だが……こいつは何か知っている可能性があるな。
もちろん、そうじゃない可能性のほうがよほど高い。いきなり犯人扱いするなんてのは以ての外だ。
「わかった。そうする。ごめんなさい」
「ふん。手を引く気など全くないという表情ですね。……いいでしょう、居なくなった人間を見つけられるというのならやってみればいい。しかし学園の不名誉になるようなことだけは慎むようにしなさい」
「わかったよ。……京一、穂乃歌。もう行こうぜ」

やれやれ、とんだ災難だったな。勘弁しろよな。
あいつらはまだ飯食ってるのか。食堂から出ちまえば、もう突っかかってくることもないだろう。
「蒼輔、大変だったねー」
「あいつらは一体なんなんだ？」
「三人とも生徒会だよ。蒼輔と話してたのが高木刃子さん。副会長だね」
「あれが副会長かよ」
「あれがってことはないと思うよ。学園きっての秀才で、成績は常にトップクラスだってことで有名な人だから」
「ていうかっ、蒼輔、副会長に突っかかり過ぎ。もうっ、端から見ててはらはらしたよ」
「お前らはやけに大人しかったな。生徒会ってのは、普段からあんな感じなのか」
「そうだね。あたしたちみたいな劣等生……緑や黄色には厳しいよ。その分、赤や青は優遇されてるって話だけど」
「やな生徒会だな」
「実力主義の表れってとこかなー。赤青は優遇するから、生徒は頑張って上を目指せって」
「讃神学校の特色、か」
そんなんだから、クラス間対立も深まるんだろうな。
「しかし、あれが副会長だったら、お前らが絶賛する生徒会長ってのも、正直眉唾だな」
「いや、そんなことないよー。生徒会はああいう感じだけど、会長だけは例外的に優しい人だから」
「だけど、組織はトップの性格を反映するものだろう。会長が人格者なら、生徒会がああはならないんじゃないか？」
「たぶん、それが会長の不思議なところなんだけどー」
「讃神学園七不思議ってやつっ？」
会長については会ってみないとなんともいえそうにないな。

が、副会長。高木刃子。彼女は失踪事件について何か知っている可能性がある。根拠はないが、俺はそういう感触を受けた。
まだ行動に移すようなレベルじゃないが、覚えておく必要はあるかもしれない。マークされちまったことも含めて、生徒会には気を許しちゃいけないな。――――

――――歩いて30分てとこか。整地されてるわけじゃないからわかりづらいが、多分黄色学校から南のほうだ。
しかし、歩きづらい島だな。学園だっていうんだから、もう少し舗装してもいいんじゃないのか？
「ここが職員部か」
「そーだよ。たぶん」
黄色学校と同じように植林で道と区分けがなされている。けど、黄色学校ほどは広くないな。大小の建物が一つずつ。
「大きいほうが教職員室が入ってる建物だよ。小さいほうは教員専用の食堂とか、休憩室とか」
「ここはあまり生徒が来るような場所じゃないってことか」
「基本的に先生とは教室で会うもんだからねー」
「で、蒼輔が会いに行くのは誰先生なの？」
「ああ、確か、クマ……久万敏郎って先生だったかな」
っと、花壇をいじっていた老人がこっちに気づいた。
「おや、学生とは珍しい。職員部に何か用かね」
豊かに伸ばした白髪と、笑顔が印象的な老人だ。70は超えてるんじゃないかと思うが、背筋はしっかりしてるな。
作業着を着て花壇をいじっていたところからすると、学園に雇われている園芸員だろうか。
「俺は吾川蒼輔、転入生です。昨日この島へ着いたので、その報告をしに来ました」
「ほうほう。君が吾川君か。よろしくな」

ふむ、この学園は園芸員もフレンドリーだ。
握手。
「こんにちわー、久万先生」
「こんちわっス」
おっと、びっくりした。俺の後ろからいきなり京一と穂乃歌が声を挙げた。
「先生？」
「蒼輔。この人が久万俊郎先生だよー」
「私たちの自慢の先生っ」
「うむ。如何にも私が久万だ。吾川君、会うのは初めてだったね。ようこそ讃神学園へ」
うーむ。この人が教員か。見えないな。
「神田君に住吉君がいるってことは、もうふたりと仲良くなったわけだ。そりゃ、好都合でよかった。吾川君、君はとりあえず3組だ」
「あ、そうですか」
3組――黄色だ。
「黄色の担任は私だから、よろしく。書類なんかはもう全部提出されてるし、不備もなかったようだから、新学期までは楽にしてていいよ。新学期には、8時までに黄色の教室に入ってなさい。場所は、わかるかね」
「ついさっきこいつらに案内されてきたところですよ」
「ほうほう。それは手際がいいことだ。他に、学園生活をするにあたって質問は？」
「いや、とりあえずは。京一と穂乃歌がいろいろ教えてくれてるんで助かってますよ」
「うむ。出来のいい教え子を持って私は幸せ者だな」
感じのいい先生って感じだな。こういう教員に教わる学生たちも幸せもんだろう。
「それから、吾川君。君の事を生徒会に勧誘するとか、しないとか、そういう話が出てるみたいだったから。僕が誘うということはない

が、考えておいてくれ」
「その話はさっき聞いたけど……どうして久万先生がそれを知ってるんですか？」
「僕は生徒会の顧問教諭をしているからね。まあ、飾りのようなものだけど。そうか、もう話が行っていたか」
この人も、生徒会の関係者か。さっきの副会長からすると、生徒会にはいい印象を持てないんだよな。
「悪いけど、俺は生徒会に入る気はないです」
「そうだな。それが賢明だ。私はあの生徒会は好かん」
「言っちゃ悪いけど、同感です。俺たちを見下しているようだった」
「担当教員として情けないが、彼らの態度をどうすることも出来ん。いつか彼らが自分で気づいてくれるかと思っているんだが」
内部の人間も、あの態度はまずいと思っているのか。なら、改められない理由はなんだ？
「そういう意味では、会長には期待しているんだがね。吾川君、前言を撤回するようだが、どうだろう。君、生徒会に入らないか？」
「それで内部から改革しろと？　申し訳ないけど、勘弁してください。みんな俺を買いかぶりすぎだ」
「ほうほう。そうか。山輪君は君のことをかなり買っていたようだったがな。そうすると、彼女の眼鏡違いだったということか」
朱姫か。全く、勘弁してくれよ。どういう話し方してんだよ。
「そういうことになりますね。とにかく、俺は平穏無事に生活できればそれでいいんで……」

……これで用は済んだな。さて、これで後は――。
「ふたりとも、つき合わせちまって悪かったな」
「全然問題ないよー、たぶん」
「水臭いって。で、これからどうする？　まだ帰るには早いし」
「ああ。これで後は失踪事件のほうに専念できる。……穂乃歌」

「んっ？」
「見澤灯の、失踪当日の足取りを辿ってみたいんだ。協力してくれるか？」

## 第九話：足どり

やっぱり、見澤のことはあまり触れられたくないんだろうな。ずっと笑顔を崩さなかった穂乃歌の顔が、今は強張っちまってる。

もう４ヶ月も経っているんだ。その間、多分かなりの葛藤があっただろう。

けど、見澤のことを何も知らない俺にとっては、彼女の親友である穂乃歌の話を聞くのが何より有用だ。穂乃歌には悪いが、必要な分は話してもらわなくちゃならない。

「おさらいをしておくと、見澤が失踪したのは去年の１２月２４日だったな」

「そっ、クリスマスイブだね」

「終業式の次の日でもあったよ、たぶん」

「考えられる動機はなく、失踪の足どりもつかめない」

「一番仲のよかったはずのあたしがわからないんだから、そのはず。しかも島から出る船に乗った形跡もない」

「その定期便以外に、島から出る術はない、か」

「少なくとも、正規のルートではないねー。私有船を使うとかすれば、不可能というわけじゃないんだけどさ、たぶん」

「当然、見澤の知り合いに船を持ってる人間はいないよな」

「あたしの知る限りでは。……そりゃ、灯のこと何でも知ってたなんて言えないけどさ」

「一応普通の高校生なんだ。そんな知り合いはいなかったと考えるほうが妥当だろうな。それに、この条件は彼女だけじゃない」

「他の人の失踪でも、やっぱり船を使った形跡はないんだよねー」

「全くっ、この学園はどうなってるんだろ」

生徒同士がガチの殴り合いを繰り広げ、片や頻発する失踪、か。なるほど、讃神学園はどうかしている。

「ま、とりあえず他の失踪については横に置いておこう。まず見澤

灯のことだけに集中したい」
　やれやれ、他のことにまで首を回す余裕はないんだよな。
「彼女の失踪が発覚したのは、具体的にどういう感じだったんだ。つまり、いつ、どこで、誰がそれに気づいたんだ？」
「この島に住んでいる人は当然みんな寮生なんだけどっ、灯は今向かってる第六寮に住んでいたんだよね」
「この島には全部で六つの寮があって、第三寮までが男子寮。第四から第六までが女子寮になってるよー」
「俺と京一は第一寮だな」
　あのオンボロ寮だ。
「２４日の早朝だったらしいんだけどっ、灯の部屋のドアが開いてたらしいんだ。それを不審に思ったおんなじ寮の子が、中を覗いてみたんだって。そしたらもういなかった」
「具体的に、発見者の名前は？」
「別府菜乃っていう二年生だよ。灯とは親しくしていたらしいけど。それでみんな呼んで来て、方々捜してみたりもしたんだけど、結局発見できなかった」
「捜したっていうのは？」
「最初は同じ寮の子たちが、寮内を捜した。でもいなかったから、先生たちに連絡して、島中を捜し始めたって」
「すぐに捜し始めたのか？　ずいぶんと手際がいい。寮にいなかったからといって、どこか友達の部屋にでも泊めてもらってたのかも知れない」
「それはたぶん、他の失踪も起こってたからだねー。だから学内中、なんとなく危機意識みたいなものが蔓延してるみたいになってる」
　初期の捜索に問題があったわけじゃなさそうだな。
「島中を捜したっていう、規模は？」
「もちろん先生たちは総動員だったし、学生も協力できる人は出来るだけかき集めて島中捜したよ。……あたしももちろん協力した。でも、まさか灯がいなくなるなんて思ってもみなかったし、どこか

友達のところにでもいて、すぐ出てくるんだと思ってた」
だが、実際は出てくることはなく、４ヶ月経った今に至っても音沙汰はない。
「島中捜したが、見つからない。船を使って島から出た形跡もない。手詰まり状態になって、今に至る、か。一つ確認したいんだけど、見澤が部屋にいたってのは確かなのか？」
「どういうこと？」
「見澤は朝、部屋にいないのが発見されたんだろう？　だったら、前日から寮に帰っていなかったのかも知れない。２３日の終業式には出たとして、その後すぐ失踪していた可能性だってある」
「その可能性はないよっ。灯が２３日の夜、第六寮に居たっていう証拠がある」
「そう友人が見ていたのか？」
「それもあるけどっ……もう一つ灯の失踪をややこしくしている理由があるんだな、寮に」
見澤の失踪をややこしくしている理由？
「でもそれは実際に第六寮についてから説明しようかー。たぶん、見ながらのほうがわかりやすいから」
「そうか。とにかく見澤が寮にいたのは確かなんだな。見澤の２３日の足どりは？」
「朝からあたしとずっと一緒にいたよ」
「親友だからな」
「明日……つまり２４日に、一緒の船で帰ろうねって話してたの覚えてる。灯も冬休みは実家で過ごす予定だったから……。なのに……」
見澤は失踪した日、実家に帰る予定だったのか。やれやれ、やっぱりこりゃ自発的な失踪ではありえないな。
「終業式は何時まで？」
「昼まで。それから一緒にご飯食べて、少しおしゃべりして……別れたのは４時くらいだったかな。灯は生徒会室に行くんだって言っ

てた」
生徒会？　勘弁しろよ。何でここで生徒会が出てくるんだよ。
「なんか提出した書類に不備があって、呼び出されたんだって。印鑑持ってた」
「まさか生徒会が失踪に関わってるんじゃないだろうな」
「蒼輔……それはいくらなんでも疑りすぎだよっ」
そうだろうか。さっき会った高木刃子は見澤の失踪について何か知っているような気がする。確証はないんだけど……。あいつらにはあまり関わりたくないんだけどな。
「わかった。午後４時に穂乃歌と見澤は黄色学校で別れて、それから先の足どりは伝聞になるんだな」
「伝聞ではあるけど、失踪についてはやっぱり学生の間で噂になるからねー。たぶん、かなり詳しい形で灯さんの足どりについては話されてるよ」
「待った。出来ればソースのしっかりしている情報だけ教えてほしい」
「灯が夕食のとき寮にいたのは確か。夏海――山西夏海って子が灯と一緒にご飯食べたって言ってた」
「その山西って子は見澤とは親しかったのか？」
「寮で一番仲良かった子らしいよ。学年も一緒だし、クラスも一緒になったことあるからあたしも友達だし。真面目でしっかりした子だよ」
「それから山西はいつまで見澤と一緒にいたんだ？」
「８時くらいにいったん部屋に戻ったんだって。それから少しして、借りてた本を返そうと思って灯の部屋に行ったらしいんだけど……そしたらチャイムを押しても返事はないし、ドアには鍵がかかっていたんだって」
「寝てたんだろうな」
「夏海もそう思ったらしいよ。ただ、部屋に行った時刻は９時半ぐらいだったって。少なくとも９時は過ぎてたって」

「それ以降で見澤を目撃した人間は？」
「いない。……そっか、夏海が最後に灯に会った人になるんだ」
「つまり正確には、午後１０時から見澤の足どりはわかっていないのか。だったら失踪は１２月２３日の夜から２４日の朝にかけて行われたってわけだな」
「それはそうなんだけどっ……だからよくわからないんだよ。寮から出られたはずはないのに」
寮から出られたはずはない？

「あー、見えてきたよ。あれが第六寮だよ、たぶん」
「どういうことだ？　なにを言ってるのか説明してくれるんだよな」
これが第六寮か……。
……なんだこりゃ。勘弁しろよ。
これは……すごく綺麗じゃないか！
塀の向こうに見える高い建物は赤レンガ造りの瀟洒な建物で、風が吹いてもびくともしそうにない。門も立派なつくりだ。柱の上で二匹の猫が向かい合っている。
おいおい、なんだありゃ。エントランスホールまであるじゃないか。俺の住む第一寮にはそんな立派なもんなかったぞ。
「……なんだこの格差は」
「だよねー。僕も他の寮を見るたびにため息が出るよ。でも第六寮が一番いい寮だから」
「一番悪い寮は？」
「もちろん第一寮だよ。たぶんね」
やれやれ。
「でっ、ほら蒼輔。ここはオートロックになってるんだよ。ここにカードを差し込んで解除するんだけどねっ」
「横にインターホンまであるな。……ううん、ドアを力ずくでこじ開けるのは無理そうだ」

「蒼輔ー。そんなことしてたら防犯ベルが鳴っちゃうよ、たぶん」
「やれやれ、そりゃ勘弁だな」
防犯設備はしっかりしているというわけか。
「で、このオートロックがどうした？」
「うん……このロックは寮生だけに渡されるカードキーで解除するんだけど、失踪事件が頻発して以来、機能が二つ追加されたんだよねー、たぶん」
「ひとつはカードキーの使用記録の取得を行うようになったこと。もうひとつが午後９時以降の寮内からの外出が出来なくなったこと」
「午後９時以降は中からロックが解除されないってことか」
「そうっ」
「９時か……。厳しいな」
「厳しいけど、仕方ないよねっ。それにお風呂も売店も寮の中にあるから生活に支障はないよ」
そもそも絶海の孤島で生活してることのほうが厳しいもんな。
「それから、門限の設定は特に運動部には死活問題になるからねー。赤と青に限って、カードキーによるロックの解除は出来るようになってるって聞いているよ」
深夜や早朝の練習が出来ないんじゃ、エリート育成の意味がなくなるからな。
だが、ここでもクラス格差か。赤と青ってのはやっぱり優遇されてるんだな。入りたくはないけど。
見澤は黄組だ。午後９時以降の外出は出来なかったことになる。
「ん？　ちょっと待った。確か見澤は、午後１０時には自分の部屋で寝ていたんだろう？　え、これどういうことだ？」
「そうなんだ……。だからたぶん、灯さんはそもそも寮から出られるはずがなかったんだ。黄組である灯さんじゃエントランスを開けられないからね。一体どうやって寮から抜け出したのか。これが灯さんの失踪に関するミステリーだよ」
「他に寮の出入り口はないのか？」

「んーっ、あたしもここに住んでるわけじゃないから詳しくは知らないけど、ないと思うよ」
「窓から出るっていうのは？」
「開閉は出来るけどほんのわずかな隙間しか開かないから、人が通るのは無理」
「もちろん僕たちが知らない出入り口が別にあるのかもしれないけど」
　そんなびっくりハウスを想像するのは勘弁だな。
「うーん、とりあえず現時点では、見澤はこのエントランスを通って寮外に出たと仮定しておこう」
「そうだけどっ……でもどういう方法があるの？」
「エントランスは、朝何時から通行可能になるんだ？」
「６時だっていうことだよー」
「見澤の失踪が発覚したのは、部屋のドアが開いていたのを不審に思った同寮生がいたからだったな。ドアが開いていたのは、どうせ６時よりも前なんだろう？」
「微妙な時間だったらしいけどっ、やっぱり前だったらしいよ」
　やれやれ。
「ただ、その条件でも、不可能ではないな」
「うん。そうだよねー。不可能ではない」
「なんだ。京一、なんか思いついてんのか？」
「えっ、そうなんだ。京一君すごいっ」
「たぶん、現実的じゃないんだけどね……。灯さんは２３日の時点では寮にいたんだ。たぶん、早朝に起きなきゃならなかったから、早めに寝たんだろうね。それから、５時くらい……何時でもいいんだけど、とにかく他の寮生が起きてこないような時間帯に起きる。それから、寮内の誰にも見つからないような場所で６時が来るまで待つ。それから、部屋に灯さんがいないことが発覚したわけだけど、寮内が混乱している隙に、ロックを解除して外に出たんだ。６時以降なら、灯さんのキーでも解除できるから」

「なるほどっ。それなら灯が寮から出られないっていう問題は解決するね」
「うん。それなら9時ー6時の壁は崩せる。でも……」
「……そうだね蒼輔。この推理には欠点があるよね、たぶん」
「どういうこと？」
「カードキーの使用記録が問題なんだ。京一の推理じゃ、見澤がカードキーを使っていないってところが矛盾してしまう」
「そうなんだよねー。そこまでは調べていなかった、じゃ駄目かな」
「いや、ありうる話だとは思う。9時から6時までは出られないってことだけに気を取られて、警察や教員は使用記録までは調べていないのかも知れない」
「……うーん」
ふたりとも、考え込んじまったな。
「そもそも、見澤のカードキーはなくなってるのか？」
「あっ、どうだろう。荷物はほとんど残ってたって聞いてるけど」
「そこは確認しておいてもいいかもしれないな。持って行ったなら使ったんだろうし、残っていたなら別の方法だ」
ん、何の音だ？
……エントランスのドアが開いた。
中から女の子が出てきた。同年輩くらいか。寮生だな。キーを使ってドアを開けたんだな。
「あっ……。あたし、思いついたかも。ねっねっ、蒼輔、今ならあたしたち、第六寮に入れるよね」
「ああ、開いてるからな」
あ、もう閉まった。
「ねっ、この方法はどう？　誰かがドアを開けたところを、一緒に出る。これならカードキーを使わずに寮から出ることが出来るよっ。ねっ、どうかな」
「ああ、そうだな」
「そっかー。だったら、ドアを開けておいたのも、わざとだったの

かもね。騒ぎになれば、寮の出入りは激しくなるし、上手く顔を隠すようにすれば、誰にも気づかれずに外に出ることもできたかもしれないね、たぶん」
「うんっ。これで謎は全て解けたねっ。灯が失踪したのは２４日の早朝。でいいかな」
「いや、まだ決めるのは早いと思うけどな」
「えっ、蒼輔、どういうこと？」
「可能性だけならまだ考えられるってことだよ」

# 第十話：可能性

やれやれ、京一も穂乃歌も難しい顔しちまったな。あくまでも、可能性、の話なんだが。

だが、見澤がいつ、どうやって失踪したのかを確認しておくのは、無意味な作業じゃない。２３日深夜か、２４か早朝か。失踪発覚したのが２４日の朝なんだから、行動可能範囲にかなりの差がでる。

やれやれ、辺りが暗くなってきたな。そろそろ解散しなきゃならない時刻だ。

「蒼輔、灯さんが寮を抜け出した、別の方法ってー？」

「言っとくが、全然現実味はないぞ。期待されて落胆なんて、勘弁だからな」

「うーんっ、でもっ、可能性は全部考慮しとかなきゃでしょ」

「まず、六寮の中に、誰も知らない秘密の抜け穴があったらどうだ？」

「……ああ、そういう話だったんだねっ」

ふたりとも露骨に残念そうな顔になったな。

「そうがっかりせず他のも聞けよ。見澤はまだ寮に残っているっていうのはどうだ？　つまり出れない寮からは出ていない」

「いやっ、それはありえないでしょ」

「……いや、ありえるかもしれないよー、たぶん。つまり灯さんは、捜索が始まった後に寮から抜け出したんだ」

「まだ現実味のある話にするなら、そうなる」

「えっ、どういうこと？」

「だからさ、灯さんはすぐに寮から出る必要はなかったんだよ。失踪が発覚して、捜索が行われている間、ずっと寮内にいても問題なかったんだ。混乱が収束した後、寮を出る」

「でもっ、それじゃさっきのあたしと京一の推理とあまり違わないじゃん」

失踪が発覚したどさくさにまぎれて寮から出るっていう方法だ。
ていうか推理したのはほとんど京一だけどな。
「ううん、違うよー。それだと失踪した時刻……というより寮から出た時刻にかなりの差が出ることになる」
「失踪したのが遅ければ遅いほど、行動範囲は限られてくるからな」
「むうっ……。あっ、でもそれだとカードキーの問題はやっぱりあたしが気づいた方法になるんだよね」
「ああ、それでもいいけど、一応それももう一つ方法がある」
「ええっ。どんな？」
「単純なことだよ。自分のカードキーを使ったら記録が残ってしまうっていうんなら、誰かのカードを使えばいい。盗んでおいたか……でもそれだとばれる恐れもあるから、協力者がいたと考えるべきか」
「なるほどねー。だったら、一応カードキーの紛失届けがないか、調べておく必要があるねー、たぶん」
「協力者っていうのは考え出したら、かなり可能性が増えることになるな。見澤の部屋に鍵がかかっていたっていうのも、協力者がいたとすればそいつが中に入っていたのかもしれない」
「そんなっ、そんなこと……」
「うーん……確かに簡単にできることだよね、たぶん。そうなれば灯さんの失踪の時刻が今度はかなり早まるんだ」
「もっと言えば、協力者が山西夏海――見澤の最後の目撃者であり、部屋の鍵を確認した唯一の人物だった場合、失踪はもっと簡単になる。門限の問題も使用記録の問題も全てクリアできる。というかややこしすぎるから、そうであってほしいよ、全く」
「そんなわけないよ。夏海のことはあたしも知ってるけど、嘘をつくような人間じゃない」
どうかな。穂乃歌が本当にそこまで山西のことを理解しているだろうか。見澤と山西が穂乃歌の知らないところでかなり親しくしていたとしたら？

「……そうだな。その問題はおいておこう。それから……そろそろ暗くなってきたな。もう帰ったほうがいいんじゃないか？」
「それ、あたしに言ってる？」
「この場で女の子は穂乃歌しかいないからな」
「そんな配慮、必要ないよっ？」
「でも門限もあるからねー。さすがに六寮みたいにオートロックで軟禁されるってことはないけど、たぶん」
「ちなみに門限は何時なんだ？」
「特に理由がない場合は８時っ。早いよね」
「穂乃歌は第何寮なんだ？」
「四寮」
「じゃ、とりあえずそっちに向かっていこうかー。蒼輔の話は歩きながら聞こうよ」
「別にまたの機会でもいいんじゃないか？」
「あのねっ、それじゃ気になって寝られないって。京一は一緒の寮だからいいかもしれないけど、あたしはそう簡単に会えないんだから」
「うん、ま、行くか……。――協力者なんていったけど、俺はそれよりも別の可能性のほうが高いんじゃないかと思ってる」
「そうなのー？」
「ああ……同じ第三者でも、見澤を拉致した人間がいると考えたほうが、むしろしっくり来る。……勘弁してほしいけどな」
「らちって……拉致っ？」
「拉致って拉致だ。見澤は失踪したんじゃなくて、失踪させられたと考えたほうがいいと思うんだ」
「……失踪する理由がないから、だね、たぶん」
「ああ。穂乃歌、見澤は失踪する直前も、普段と変わりなかったんだろ？」
「うん。悩みとかもなさそうだったしっ、さっきも言ったとおり、灯はあたしと一緒に実家に帰るつもりだったんだから」

「だから自発的に失踪したと考えるよりも、犯罪に巻き込まれたと考えるほうが蓋然性が高い。拉致されたんだとしても、さっきの方法は全部当てはまるよな。協力者を犯罪者に替えればいい」
「だとしたら……そんなっ、学生の中に灯を拉致した人がいるってこと？」
「そうなる……一応な。そもそもこれはそういう類の問題なんだ」
灯は動揺してるみたいだ。無理もないな。京一は落ち着いてるみたいだ。その可能性は考えてあったんだろう。
「言っただろ？　これはあくまでも可能性だ。別に学生の中に犯人がいるって言ってるわけじゃない。見澤は秘密の出入り口から抜け出たのかも知れないし」
「……あればねっ」
「出来ればそれも調べたいな」
秘密のルートはともかく、寮に侵入する方法がないかは確かめたい。侵入さえ出来たなら、六寮の生徒以外にも犯行は可能だったということになる。逆にどうやっても侵入できないなら、第六寮の生徒が圧倒的に怪しい。
「いずれにせよ、この状況は密室というには抜け道がありすぎるんだ。……ただな、自発的にしろ拉致にしろ、何でわざわざこんなややこしいことをしたのかがわからない」
「えっ、どういうこと？」
「わざわざオートロックされてる場所から抜け出るより、もっと楽な状況があったって話だよ。自由に外で動ける時間帯を狙えばよかっただけの話だ」
「ああっ、そうだよね。例えば学校から帰寮するときとか」
「わからん。そうじゃなきゃならない理由があったのか……？　とにかくこの点がわかれば、失踪についても見えてくると思うんだけど」
まだ失踪事件に関しては何もいえないな。

「……なんかの建物が見えてきたな。あれが第四寮か？」
「うんっ。あたしが住んでる場所」
「なるほど、第六寮よりは旧型だが、第一寮よりはだいぶ綺麗だ」
「いいよねえ、他の寮に住んでる人たちは」
「ちょっとっ、なんか視線が痛いんだけどっ。あ、あたしは何も悪くないぞっ」
ため息が出る。京一も同じみたいだ。
「お茶でも飲んでく？」
「いや、いいよ。もう遅いしな。今日はいろいろ話が聞けてよかった。ありがとう」
「それはこっちの台詞だよっ。灯のこと捜してくれて、ありがとう。正直、失踪した人たちについてはもうみんな諦めがちで、触れないようにしておいたほうがいいっていう雰囲気だったんだ」
「そうか。そうだろうな」
ん……人影だ。第四寮の入り口に近づいてくる。ここの寮生かな。
ん？
「お、穂乃歌だ。お帰り。それからただいま。こっちの人たちは……京一君に、……蒼輔だね」
聞き覚えある声だな。
「朱姫、か」
そう、山輪朱姫だ。昨日、讃神島に渡る船上で会った。事実上、俺が讃神島に来て初めて会った人物だ。
「うん、すばらしいね、覚えてくれてたんだ。昨日会ったばかりなんだから、当たり前か」
「朱姫はここに住んでいるのか」
「そうだよ。穂乃歌と同室」
そうだ。そんなことを穂乃歌が言っていたな。
「お帰り朱姫っ。朱姫もどっか行ってたの？」
「ちょっと、やぼ用でね」

「生徒会がらみっ？」
「残念でした。でも、もしかしたら会長を頼らなきゃならなくなるかも知れない」
「面倒なこと？」
「大丈夫。何とかなると思う」
「京一も、朱姫と知り合いなんだな」
「うーん、知り合いってほどじゃないよ、たぶん。ただ山輪さんは結構顔が広いみたいで」
「ちょっと京一君、あーあ、それは残念だな。わたしは京一君のこと友達だと思ってるんだけど」
「でも、クラスが違うんだろ？」
朱姫は緑で、俺たちは黄色だ。
「クラスが違ったって、友達は多いほうがすばらしいじゃん」
「そうか？　人間なんて気のあうやつだけで勘弁だけどな」
「見解の相違だね。残念」
そんなこと言いながら、笑ってる。やれやれ。
「でも、もう友達ふたりも作ってるんだね。うんうん、すばらしい」
「友達ってか、案内してもらってただけだよ」
「オーケイ、そういうことにしておこう。蒼輔、見澤灯さんを捜してくれるんだって？」
「できればそうしたいと思ってる。でも正直つかみどころがないな」
「ありがたいよ。わたしも手伝いたいんだけど、悪いことに他にすることがあるんだよね。ごめん。蒼輔が捜してくれるのは、助かる」
「そうだ、朱姫は生徒会だったな」
「うん、どうした？」
「今日、副会長ってやつに会ったけど、ありゃどうにかならないのか？」
「ああ、確かに刃子さんの態度はね……。でも悪い人じゃないよ」
「どうかな。というか人のことあまりしゃべらないで貰いたいな」
穂乃歌はともかく、生徒会の人間にまで話されたのは困る。

「えー、いいじゃん。蒼輔すばらしくかっこよかったんだから」
「勘弁しろよ」
もっと誰かにしゃべるつもりじゃないだろうな。
そうか、朱姫は高木刃子と同じ生徒会の人間だったな。生徒会ってのは、どうも信用置けないんだよな。根拠はないんだが。朱姫にも、あまり気を許さないほうがいいのかもしれない。
ん、朱姫が真顔になったな。
「あのさ蒼輔、一個聞いていい？」
「なんだ？」
「何か隠し事してるよね」
「なんだよ、それ」
「だから、蒼輔は私たちに何か隠していることがある。そうだよね？」
「何かってなんだよ」
「わからない。別に言いたくなきゃ言わないでいいんだけどね。言いたくない？」
「だから、何の話だよ」
「蒼輔が隠していること。それとも、言いたくても言えないこと、かな。もちろん、私が知らないほうが都合のいいことかも知れない。それは蒼輔の判断に任せるしかないから……。でも、後になってから後悔するなんて、すばらしくないよね」
「……朱姫は何を知っているんだ？」
「何も知らない。わたしはただ、わかるだけ」
「なにが？」
「どうでもいいことばっかり」
「……さっぱりわからん」
「じゃ、イエスかノーかだけで答えて。蒼輔は隠し事をしている？」
「……誰にだって隠し事はある。そうだろ？」
「それが回答だね。うーん、わからないなあ。蒼輔を信じてもいいのかどうか、よくわからない。すごいな、こんなことは初めてだ」

なんか一人でうなずいている。
「だから訊いてみようか。蒼輔、わたしは君を信じてもいいの？」
「なにを？」
「うーん、そうだな……。蒼輔がこれからみんなを悲しませるようなことをしないことを」
「そんなことをするつもりはないな。けど、俺を信用するかどうかは朱姫が決めることだ」
「なるほど。それもその通りだね。すばらしいな。じゃ、信じようかな。うん、蒼輔、信じるよ。これからわたしは蒼輔のことを信じる」
「……それはどうも。よくわからんが」
「だから蒼輔、わたしのことを裏切らないでね。これはお願い。応えるかどうかは蒼輔に任せる」
「裏切るとどうなるんだ？」
「非難はしない。でも……泣こうかな」
泣くのか。
多分、そんな約束はするべきじゃないんだろうが……朱姫に泣かれるのは勘弁だな。
「わかったよ。俺は朱姫を裏切らない。これでいいか？」
「うん、すばらしいね。……覚えておいてね蒼輔。わたしはなにがあっても君のことを信じるから。じゃ、わたしはもう中に入るね。灯さんの捜索、よろしくね」
「あっ、じゃあたしも一緒に行く。じゃね、蒼輔に京一」
「そうか。じゃ、またな」
「蒼輔っ。灯、見つかるかな」
「わからない。……けど最大限の努力はする」
「うんっ。京一も、協力してくれてありがとねっ」
「いやー、たぶん僕じゃ大したこともできないけど」

……行ったか。
「じゃ、俺たちも帰るか」
「そうだねー」
「なあ京一。朱姫ってどういう人間だ？」
「どうって……僕もよく知らないよー。生徒会の人で、人にはよく話しかけてるけど」
「交友関係が広いってことか」
「生徒会だから、なるべく多くの人と話そうとしているのかも知れない。クラスが違う僕でも話したことがあるくらいだからね」
「この学園の生徒会ってのはかなり権力が強いんだよな」
「たぶんね。でも山輪さんはそういう雰囲気のない人だね。誰にでも気さくで、対等に話してる。そういう意味では、会長と似てるのかも知れないな。そういえば山輪さん、会長と付き合ってるとか何とか」
「誰とも付き合ってないらしいけどな。本人がそういってた」
「ふうん。てことはやっぱり、蒼輔の興味って、そういう興味なわけだ」
「そういうってどういう興味だよ」
「蒼輔、山輪さんと話してるとき楽しそうだったもんね」
「そんなことないよ」
「別にいいんじゃない？　山輪さんかわいいよね」
「なんだよ。京一もそう思ってんのか」
「も、ってことは、やっぱり蒼輔、そう思ってるわけだ」
「……京一、はめたな？」
「僕は何もしてないよ。ふーん」
なにをニヤニヤしてやがる。
「別にそんなんじゃねーよ」
「はいはい。……蒼輔、ちょっと確認しておきたいんだけど、失踪事件についてどう思ってる？」
「どうもこうも、まだ手探り状態だよ。いえることはない」

「だからつまり……これは犯罪かどうかについて」
「ああ、確かにその可能性は高いと思ってるけどな、まだ決め付けちゃいない。見澤は人にいえないような悩みを抱えていて、それで人知れず失踪したのかもしれない。それも京一たちが考えたように、ありえる話だろ？」
「でも、可能性の問題だよ。自発よりも犯罪のほうが蓋然性が高い、だよね。それも、単独犯よりも複数のほうが」
「……京一もそう思ってたか。ああ、拉致の場合、一人でやるのは無理がありすぎる。複数犯と考えれば、うなずくことが出来る」
「どれくらいの規模なんだろう？」
「そこまでは俺もわからん。いや、何もわかっちゃいない」
「蒼輔……この学園は今どうなっているのかな？　何か……悪いことが起きるような、もう起こってるんだっていうような、嫌な気分がする」
「ああ、だが、だからこそ俺たちが動かなきゃいかない。勘弁してほしいところだけどな。そうだろ、京一」
「……うん」
「よし、明日からは今日の裏づけをやっていこう。どこかにほころびがあれば、そこから活路が見出せるかも知れない」

# 第十一話：追跡

潮風に、潮のにおい。今日は少し暑くなるみたいだが、海から吹く風はほどよく涼しくて気持ちいい。鳥が鳴きながら空高く飛んでいるのも風情があっていいな。

こう風景がいいとずっと眺めていたくなるんだけど、勘弁してほしいことにそういうわけにもいかないんだよな。俺にはやるべきことがある。

まず、讃神島と本島を結ぶ定期便の乗客名簿を確かめておかなくちゃならない。失踪した見澤灯、及びその他6名の乗船記録がないことを、この目で確かめておきたい。

しかし、本当に乗船してなかったとして、彼らはどこへ消えてしまったんだ？　長いやつでもう1ヵ年、もっとも短い見澤灯であっても4ヶ月。そんな長い期間、この讃神島で誰にも見つからずひっそりと生活してきたっていうのか？

もしくは、考えたくないことだが、彼らはもうこの世の人間ではなくなってしまっている……？　その場合、事故か殺人か……殺人と考えたほうが合理的だろうな。

おいおい、殺人鬼がこの島に潜んでいるっていうのかよ。しかも、悪くすれば7人も殺した大量殺人犯だ。まだ犠牲者がでる可能性だって高い。勘弁してほしいな、こりゃ。

とはいえ、そうと決まったわけじゃない。失踪した人間の、せめて一人でも行方がわかればそんな悪い想定は回避される。どうにかして、誰か見つけ出さなくちゃいけない。

それから、見澤の失踪に関して、彼女の最後の目撃者である山西夏海にも会っておきたい。穂乃歌は山西を信用置ける人物だといったが、もし山西が見澤の協力者だった場合、山西の証言は信憑性をなくす。そうでなかったとしても、実際に会っておくのは意義があるはずだ。

……さて、定期便の事務所はこっちか。
「すみません」
事務所にいるのは一人だけだ。カウンターの奥でせんべいを食べながらテレビ見てやがる。
船が出ていない時刻は人が来ないんだから、当たり前か。
「今日は船は出てないよ」
無愛想だな。まだこっちは何も言ってないぞ。
「船は土日と水曜日だけですね」
「そうだ。それに学期の終わり始めの臨時便だけ」
定期便は週3度の往復だけだ。学生はさぞかし不便だろうな。
「船に乗りたいんじゃないんです。乗客名簿を見せてくれませんか？」
「いやだ」
「守秘義務ってやつですか？」
「そんなもんはないよ。出すのが面倒くさい」
なんだよ、そりゃ。やれやれ。
「こっちで勝手に調べて、全部元通りに戻す。これでどうです？」
「……ま、いいさ。その代わり、こっちに迷惑かけないように」
……なんて態度だ、っていいたいとこだけど、自由に名簿を見れるのはありがたいな。情報管理が甘すぎるんじゃないか、讃神学園。乗客っていっても学生か職員しかいないんだから、そんなもんか。
「ほら、勝手に入れ」
ドアの鍵くらいは開けてくれたか。あとは戻ってテレビに集中するつもりらしい。好都合だ。
ふむ、この棚に書類やら名簿やらが収まっているらしいな。
乗客名簿は……どれだ？　ファイルはあるんだけど、背にファイルの名前を書いてないから、何がなんだかさっぱりわからん。
勘弁してほしいけど、一個一個見ていくしかないか。

……。
お、乗客名簿一つ発見。
ということはこの辺が乗客名簿なのか？　――違うな。種類ごとに整理されてないから、いろんな種類のファイルがいたるところに散乱している。
なるほど、これなら出すのが面倒くさいってのもわかるな。
……整理しとけよ。
「あんたも、失踪事件とやらを調べてんのかい？」
うぉう。さっきの事務員だ。いきなり話しかけてくんなよ。テレビはもういいのか？
「そうですが、俺のほかにも誰かが？」
「いや、ちょっと前に、失踪だかなんだかがあって、名簿を出せっていわれたもんでね」
「年末か、年が明けたころのことじゃないか？」
「ああ、そうだったね。仕事始めそうそう、また名簿をよこせときた。面倒くさかったったりゃなかったさ」
失踪者は7人出ているんだ。その都度名簿を提出させられたんだろう。
「そのときにちゃんと整理しときゃよかったのに」
「なんか言ったか？」
なんだよ。正論を述べただけだろ？
「失踪者が出る都度、あんたみたいに名簿を見に来る学生がいたもんさ。どいつもこいつも、友達がいなくなったってしょんぼりしてたよ」
「それでもやっぱり名簿に名前はなかった、か」
「あったって言うやつはいなかったねえ。諦めないやつは日が暮れるまで探して、仕舞いにはますますしょんぼりして帰っていくのさ」
そうなのか。失踪者の名前は全部控えてきたが、どうやら調べても無駄になりそうだな。
「でもこれ、見てみれば手書きだけど、乗客に書かせるんですか？」

「乗船許可証を出させて、私が書くんだよ」
「許可証？」
そんなもん、来るときはいらなかったぞ？
「それがないと、島から抜け出して遊びまわる学生がいるからね」
「それはどうやったら手に入るんですか？」
「あんた学生なのに、そんなことも知らないのかい？」
「転入したてなもんで」
「島を出る理由を書いて、学園に申請する。そしたら許可証が発行される。それだけのことだよ」
許可証か。島から出るって言うだけでも、面倒くさいことをやらされるんだな。
「それは偽名でも発行されるんでしょうか？」
「知らないけど、わざわざ偽名を使う必要はないだろう」
「だから今回のように、失踪する場合」
「ああ、なるほどね。でも発行は学園がするんだろう？　だったら偽名なんかで通るものかねえ」
それはその通りだ。だったら、誰かの許可証を盗むとか……。いずれにせよ、条件付きだが島から出た可能性もゼロではなくなったな。
……。
「ちょっと聞きたいんだけど、いいですか？」
「だめだ」
にべもないな。
「これ、12月23日の名簿も、25日も26日もあるのに、24日の名簿がないんだけど、何故ですか？」
「だめだって言っただろう、全く。24日かなんか知らないけど、要するに終業式の次の日だろう？　その日の出航がないのは当然だよ。だってその日は出航しなかったんだからね」
「どうして？」
「だから、その日に失踪者かなんだかが出たんだろう？　そのせい

で船を出すのは見送ろうってことになったのさ」
なるほど。失踪者が出たんだから、少しでも遠くへ行かれないように、船を止めるのは当然のことだ。
「とすれば、２４日のうちに島から出ることは不可能だった――？」
「船が出てないんだから、出ようとしたって無理だわいねえ」
とすれば見澤が島を出たとすれば、最短で２５日だったわけだ。２５日には帰省する学生のためか二回船が出ているが、２４日に船がなかったせいか乗客がかなり多い。
混雑しているのは紛れ込むのに都合がいいとも、知り合いに会う可能性が高くなるともいえるな。
いずれにせよ、見澤は島外に出ようにも最低一日間は讃神島で過ごさなきゃならなかったわけだ。……とすればやはり、島のどこかに隠れる場所があると考えるべきだろうな。
「もういいのか？」
「はい。必要な情報は大体揃いました」
「そうか。あんたも大変だな」
「いえ。そうだ、競技場ってとこに行きたいんですけど、どうすればいいでしょうか」
「競技場なら、バスが出とるぞ。ほら、そこに時刻表」
バスは学生証があれば乗れるんだったな。
……なんだこれ。次のバスに乗るとすると、２時間待ちになるな。
「本数少ないですね」
「春休みだからな」
「勘弁してほしいな。歩いて行けますか？」
「競技場なら遠くないな。外でて、看板を辿っていけば３０分もすれば着くよ」
「そうか。どうもありがとう」
仕方ない。勘弁してほしいが、歩くか。

木々の合間を縫うように道が伸びている。讃神学園は林を切り拓いて作られた学園だ。今も各施設のほかは手付かずの林のままのようだ。
交差路では看板が出ている。しかし汚れやさびがひどいな。ずいぶん前からある看板なんだろう。ちょっと不安だ。
ん？　道の真ん中に、誰か突っ立っているな。邪魔なんだが。
……四人、いや、五人いるみたいだ。四人が一人を囲むように立っている。
「一人で来たのは間違いだったな。このまま素直に帰すと思うか？」
穏やかな雰囲気じゃないな。
勘弁しろよ、またリンチか？　この学園は一体どうなってやがる。
「頼むよ、参ったな。こういう展開は嫌なんだけど」
囲まれてるやつが嘆いてる。囲まれている割には余裕があるな。
ちょっと声をかけてみるか。
「おい」
驚いたのは一人だけか。他のは動じないな。
「一人に対して四人ってのは、穏やかじゃないよな。なにやってんだ。俺も混ぜてくれよ」
「誰だ、お前」
「正義の味方だよ。がらじゃないけど」
「失せろよ」
お、一番近いやつがこっちに近づいてきた。
殴る気満々って顔だな。
やれやれ、勘弁してほしいな。いい加減正義の味方には飽きてきたんだけどな。
「おいおい頼む。喧嘩はよせ！」
囲まれてるやつが叫んだ。やれやれ、リンチされてるってのに、のんきなやつだ。
でも、向こうから殴ってくるものは仕方ない。
相手の右手が伸びる。

ストレート――を、僅かに首を捻ってかわす。
悪くないが、遅いな。
さて、ちょっと強めに行くぞ。
やっ――。
こめかみに一撃。
…うん、一発ＫＯってとこだな。快調快調。
ぞく。
殺気だ。
一人やられて、他のやつらも目の色変わったな。
三人か……正直、あまり自信ない。やるけどさ。
ん？
「待った、待った。喧嘩はよせ。助けてくれるのはありがたいが、頼む、ここまでにしろ」
囲まれていたやつだ。おいおい、この期に及んで、こいつ、筋金入りのお人よしだな。
「勘弁しろよ。そもそも、向こうが仕掛けてくるんだ」
「そうだな……。お前らも、やめろって、頼むよ。俺はただ話し合いがしたかっただけなんだ。な、克司、頼む」
カツシ……誰だ？
「交渉はもう決裂した。終わりだよ。そもそも、お前ら赤が原因なんじゃないか」
ふむ、どうやら応じたやつがカツシっていうみたいだな。どうもこいつがリーダーって感じだ。
赤……、か。
克司ってやつのバッジは青。リンチされてたやつは赤。
どうもこれは、赤と青の対立が原因のリンチみたいだな。
――っと。
残りのふたりが殴ってきた。やれやれ、危ないな。向こうの会話中に殴ってきやがって。イベントシーンのお約束を知らないのか、こいつらは。

こいつらのバッジも青だ。この学園のクラス対立ってのも相当だなこりゃ。
「おい、これでも矛を収めろって言うのか？」
「くそ、お前らはどうしても事を荒立てないと気がすまないのか。仕方ない、どこの誰だか知らないが、よろしく頼む」
オーケイ。これで被害者公認って事で。
いきなり殴ってきた罰だ。手加減無しで。
はっ。
――さあ、これで今日一日飯が食えないぞ。
さて、次は――
っと。
後ろからハイキック。かわす。
回し蹴り――はガード。
掌底。蹴り。ワンツー。
肘うち――はフェイントで、蹴り。
掌底。
……何とか全部さばけているが、隙のない連続攻撃だ。
「さすがにリーダーだけあって、やるなあ」
俺の話には応えず、黙々と攻撃を仕掛けてくる。機械みたいだ。面白味のないやつめ。
しかし、これじゃ反撃する間もないな。
どうする？
「がっ」
誰かが倒れるような音――
っと、その音に気をとられたな。その隙は命取りだ。
正確に、あごを狙う。
でりゃっ。
――よし、命中。
……おいおい、これで倒れないのかよ。タフなやつだな。
「でもふらふらするだろ。もう勝ち目はない。撤退しろよ」

「お前、一体なんなんだよ」
「言っただろ、正義の味方だ」
「くそ、お前ら、立て。終わりだ。行くぞ」
つっこめよちくしょう。

……やれやれ、行ったか。
リンチされてたやつも無傷みたいだ。風邪薬飲んだみたいな顔してる。
「ありがとう助かった、と言うべきなんだろうな」
「言いたくないなら、別にいいよ。むしろ参戦してくれて、こっちが助かった。一人は君がやってくれたんだな。おかげであいつに隙ができた」
「いや、俺一人だったらどうなっていたことか。ありがとう。怪我は？」
「ない。そっちも無事みたいだな」
「ああ。俺は天山水樹。よろしく頼む」
ん、なんか握手にも慣れてきたな。

# 第十二話：友人

「俺は吾川蒼輔だ。ともあれふたりとも無事でよかったな」
しかしこの学園はどうなってやがるんだ。転校から3日で3度も乱闘騒ぎに巻き込まれるか、普通。特殊な学校だとは聞いていたが、これはちょっと特殊すぎないか。
この天山水樹ってやつも大したもんだ。たった今しがた乱闘劇があったっていうのに、まるで動揺している様子がない。ただ立ってニコニコしているだけのはずなのに、なんとなく威圧感のあるやつだ。
「あがわ……そうか」
「俺は転入生だからよくわからないんだけど、あれもクラス対立ってやつの一環なのか？」
水樹のバッジは赤。さっきのやつらは青。朱姫の話では、赤と青の対立が特にひどいってことだった。
「できれば変な先入観は持たないでほしいところなんだけど、ま、対立があるのは事実だ。だがそんなに深刻なものじゃない」
「殴り合いが浅薄なものなのか？」
「さっきのはただの話し合いだったんだよ。確かにちょっとこじれたところだったが」
「おいおい、実際に俺は殴られたんだぞ。それとも俺が介入しなけりゃ丸く収まってたって言うのか」
「いや、そういうつもりはないんだ。蒼輔が助けてくれて本当に助かった。ただ、こんなことで讃神学園に嫌な印象を持たないでほしいってことだ」
「そんなもん持たないよ。島に来て3日だが、友達もできた」
「そうか、それはよかった。クラス対立については、解決するよう生徒会が動いている」
「生徒会、ねえ。あいつらに何ができるかな。副会長の高木刃子っ

てやつに昨日あったけど、とても尊敬できるような人間じゃなかったな」
「それはそう、かも知れないが」
「ナンバー2があれで生徒がついてくるのかな。生徒会長は人望が厚いってみんな言ってるけど、どうだかな。高木を野放しにしているだけでも高が知れると思うけど」
「……いや、副会長は副会長でいいところもあるんだよ」
「へえ、水樹は高木を擁護するんだな。他のみんなは会長のほうを持ち上げるのに」
「当たり前だ。蒼輔はクラス対立に興味があるのか？」
「別に興味があるわけじゃない。こっちに火の粉が降りかからなければ問題ない。ただ、学園生活を邪魔されるのは勘弁願いたいだけだ」
「積極的につつくというわけではない、か。なら蒼輔、頼む。少し待っていてくれないか。クラス対立については生徒会が水面下で活動しているんだ」
「生徒会が何とかできるとは思えないけどな。だけどさっきも言ったように俺は何もするつもりはないよ。俺がすることといえば正義の味方だけだ」
「さっきみたいに、囲まれている人間を助けるか」
「おいおい、これは笑うところだよ。正義の味方なんてがらじゃない」
「そうかな、結構似合ってると思うけど。それに蒼輔、かなり強いな」
「そうかな。まぐれだよ」
「まぐれ……？　訓練された動きのように見えたけど」
「まぐれだよ」
「まぐれかよ。はは。わかった、それでいい。でもがらじゃないなんて言わずに、これからも困っている生徒がいたら助けてやってくれ。頼む」

「なんで水樹が頼むんだよ。勘弁してほしいな」
「そういうなよ。ジュースぐらいはおごってやるから」
いらねえよ。やれやれ。
「ま、気が向いたらな」
「おごるで思い出した。さっき助けてくれたお礼に、昼飯でもおごらせてくれないか。ここからすぐのところに学生部の学食がある」
「礼なんていらないよ。それに悪いけど先約があるんだ。競技場ってのはこっちでいいのか？」
「そうか残念だ。競技場ならその道を行って、あとは看板に従って行けばいい――ならここでお別れだな。今日は本当に助かったよ。じゃあ蒼輔。また会おう。そのとき敵味方にならないことを祈るよ」
敵味方？
なんで水樹と敵味方にならなくちゃならないんだよ。
……わからん。とにかく行くか。

競技場ってのはここか。
さすがに広いな。フェンスを通して４００ｍトラックが見える。観客席みたいなのはないんだな。でもナイター設備はちゃんとあるみたいだ。そこらへんはさすがに讃神学園か。
「あがわそうすけー」
……うるさい。
なんてでかい声だ。
どこからだ？
……向こうに何かの建物がある。ちょっと遠いからなんともいえないが、体育館だろうか。島内での場所を指す言葉として『競技場』と言った場合、あれもその一部に入るんだろう。
「あーがーわーそーうーすーけー」
馬鹿でかい声はそっちのほうから聞こえてくるみたいだ。
……自分の名前がでかい声で連呼されるのは、恥ずかしいんで勘

弁してもらいたいな。
やれやれ仕方ない。走って行ってみるか。
「来たっスね。やっぱり吾川蒼輔だった」
「……勘弁してくれよ。あんまり人の名前大声で叫ばないでくれないか？」
「いいじゃないっスか。おかげでこうやって会うことができたんだし」
「山川夏海さんだな。こっちの自己紹介は必要ないみたいだな」
「吾川蒼輔だよね。穂乃歌から聞いてるよ。わざわざ来てもらって悪かったスね」
山西夏海は、失踪した見澤灯を最後に目撃した人物だ。
陸上部所属で、今も陸上ユニフォームを着ている。男と見まがうような短髪に、小柄ながら引き締まった体躯がよく日焼けしている。それに必要以上に大きな声で周囲に明るい雰囲気を振りまく活発な女の子だ。
「会いたいって言ったのはこっちなんだから、当たり前だ。でもあまり時間が取れないんだったよな」
「讃神学園の部活は、どこも練習きついからねえ。特にあたしみたいな凡人は、周囲に置いてかれないようにするので精一杯で」
言葉の割りに、大口開けて笑ってる。
こういう明るい人間は苦手だが、好感が持てるな。
「だからごめんね。時間取れるのは昼食休憩中だけなんだ。……こっちね」
なるほど、そこかしこで夏海と同じようなユニフォームを着た人間が弁当を広げている。夏海も肩から小さいバッグを提げている。
「ここっス。ここなら話もしやすいよね」
……建物の裏手だ。ちょうど日陰になっていて、しかも他に人もいない。
なるほど、わざわざ話しやすい場所を選んでくれたってわけだ。
「じゃ、ちょっと失礼して。……もぐもぐ……。蒼輔はご飯食べな

いんスか？」
「俺は後で食べるからいいよ。単刀直入に聞こう。見澤灯を最後に目撃したって言うのは、本当か？」
「疑ってるんスか？　私疑われるようなことしたかな」
「俺は疑えるものは何でも疑うようにしてるんだ。というか、夏海が嘘をついてくれていたほうが、全部解決できてありがたい」
「複雑っスからねえ。灯の失踪は。でも私が言ったことは全部本当っスよ。あの日は私と灯で一緒に夕ご飯食べた」
「それが何時くらいのことなんだ？」
「何時と言われても……。７時か、８時くらいじゃないっスかね」
「そのとき見澤はどんな様子だった？　つまり、何かに悩んでいたり思いつめていたりするような感じはなかったのか？」
「それはないな。あのときのことは何回か思い返してみたんスけど。……もぐもぐ……。冬休みに入ったところだったから、やっと休みだとか、やっぱり家が恋しくなるものだとか、そんな話ばっかしてたように思うんスよね」
　やっぱり、見澤に失踪するような動機はなかったのか。
「見澤は帰省する予定だったんだよな」
「うん。穂乃歌と一緒に帰るって、そう言ってたと思うっス」
　そうだ。穂乃歌もそんなことを言っていたな。
「帰省できていいなあって、そんなこと言った覚えがあるっス。私らみたいな部活動生は帰省できても正月だけとかだからね」
「夕食のあとはどうしたんだ？　確か……」
「そう。私、本を返しにいったんスよ。……もぐもぐ……。そしたらノックしてもでてこなくて、鍵もかかっててた。だからもう寝てるんじゃないかと思ったんだけど」
　しかし美味そうにおにぎり食うなあ。
「あげないっスよ」
「いらない。借りてた本っていうのは？」
「画家の作品集っス。私、タイムが出ずにちょっと落ち込んでたこ

とがあって、そんな時灯が渡してくれたんスよね。世の中には苦悩しながらも自分の信じる道を貫いた人間がいるんだって、そう言ってたっけな」
「わざわざその日に返しに行った理由は？」
「理由って言われても……。ちょうど冬休みになったところだったんで、キリがいいと思ったんじゃないっスかね」
「つまり、ただの偶然だと」
「そうっスよ。それ以外何があるんスか？」
夏海が失踪の協力者だという可能性だよ。
……だが、少なくとも夏海の表情を見る限り、それはなさそうだな。
「それが9時半のことって言うのは間違いないのか？」
「そういわれたら困るんスけど……。この確認は、エントランスのロックのためだよね」
「そうだ。午後9時まで見澤が寮にいたっていうんなら、ちょっと面倒なことになる」
「だったら、やっぱり9時は過ぎてたと思うな。……もぐもぐ……。絶対にそうかと言われると自信ないけど……」
断言はできないか。
そりゃそうだろう。人間の記憶はあいまいなものだ。だが、あいまいでも信頼できないものじゃない。
この場合、夏海の認識が齟齬をきたしているという判断を下すほうが無理だといっていいだろうな。夏海が見澤の部屋を訪れたのはエントランスがロックされた9時以降だと判断しておいていいだろう。
「部屋の中に見澤がいたという確認はしてないんだよな」
「どういうことスか？」
「見澤の姿を見たり、声を聞いたりしたってわけじゃない」
「そうっスよ。だから寝てたんだと思うんだけど……。あ、もうその時点で灯はいなくなってたってことが言いたいんだね」

「そうだ」
「でも、灯の失踪が発見されたときは部屋のドアが開いてたっていうんだよ。もう灯がいなくなっていたんなら、誰がドアを開けたんスか？」
「合鍵は？」
「寮の管理人さんは持ってると思う。でも、管理人さんが開ける理由もないっス」
「盗まれたとか、他の合鍵があるとか」
「盗まれたって……。そんな話は聞いたことないし、灯が合鍵作ったてのも聞いたことないよ」
「そうか……わかった」
「蒼輔、一体なにを考えてるんスか？」
「いや、なんでもないんだ」
見澤の失踪が誰かの拉致によるものだった場合、部屋にいたのは別の誰かだという可能性がある。だが、根拠がない以上、そんな考えはあまり人に話すものじゃない。
「見澤が失踪した理由についてはどう思ってるんだ？　仲良かったんだろ？」
「うーん、わからないっスねー。さっきも言ったように、悩んでる様子もなかったし」
「悩みじゃなくても、いつもと違ったところはなかったのか？　新しい友達ができたとか、変な遊びにはまっていたとか……」
失踪のもっとも多い原因は人間関係のトラブルだ。新しい人間関係について、他人にはいえないような悩みを抱えていたとしたら？
変な遊びっていうのは、例えば博打のような裏社会に関係する遊びを差す。この場合、失踪が犯罪に巻き込まれた可能性があることを考慮している。
「思い当たらないっスねー。……ふう、ちょっとお茶飲も……。あ、そういえば灯、最近絵を描くのが楽しくなってきたって言ってたかな」

「絵、か」
「灯、美術部だったっスからね。やっとちょっとは上達してきたよって、いつかそう言ってたことがあったような気がする」
うーん、失踪に関係あるかなあ。
絵が上手くいかないっていうんならともかく、楽しいんなら失踪の理由にはなりえないと思うけど。
「新しく変わったことじゃなくて、逆にずっと以前のトラウマが呼び起こされたっていうようなことも考えられる。どうだ？　どんな些細なことでもいいから、思いつくことはないか？」
「うーん、そういうことだったら、やっぱり私より穂乃歌のほうが適任だとは思うんスけどねえ」
「親友なんだよな。穂乃歌と見澤は」
「そうだよ。私、穂乃歌とも灯とも仲よかったけど、やっぱりあのふたりの仲ほどには親しくなかったと思う。ずっとべったりしてたっていうんじゃないけど……なんか端から見てて信頼しあってるなって、そう思ってたから」
「穂乃歌と見澤の間にトラブルがあった可能性は？」
「は……？　なんスか、それ」
「怒るなよ。俺だって聞きたくないんだ。でも、疑える可能性は全部疑わなくちゃならない」
「あのふたりに限ってそんなことはなかった。それは断言できるっス」
そうか。……そうだろうな。
俺だって穂乃歌が見澤を心配している様子が、嘘だなんて思いたくない。
やれやれ、勘弁してほしいな。手がかりを掴むどころか、どんどん手詰まりのほうへ近づいているような気がしてきた。
「……あー、食った食った、ごちそうさまでしたっと。じゃ、申し訳ないっスけど、そろそろいいかな。時間あまり取れなくて、本当にごめんね」

「いや、ありがとう。かなり参考になったよ。あ、あと一つだけ。六寮のカードキー、見せてくれないか？」
「別にいいけど？　……はい」
「ふむ。見たところ、ただのカードって感じだな。複製するのは難しいか」
「それは無理っスよ。最新の技術で作ってるってことだったから」
「そうか……ありがとう。じゃあな」
「蒼輔、頑張ってね。灯、見つけ出してね。じゃ」

# 第十三話：美術室

西に面している校舎の窓から夕日が差し込んでいる。窓から見える夕焼けは綺麗な正円を描き、放たれる熱が空気を歪め微かに揺らいでいる。

ここが美術室か。

やれやれ、朝から駆けずり回ってばかりだ。

「ちょっと邪魔するよ――って、人いないなあ」

室内にいるのは一人だけだ。一心不乱にキャンバスに向かっている。絵の巧拙は俺にはわからん。

っていうか、無視かよ。

「あー、ちょっといいかな。聞きたいことがあるんだけど」

……、反応なし、か。

邪魔されたくないのはわかるけど、何か言ってくれてもいいんじゃないかな。

画布に向かって一人筆を走らせる男子。バッジは緑色の筆だ。

つまりこいつは出来のよくない芸術組だってわけだ。へん、芸術家気取っといて落ちこぼれかよ。

……と、これじゃいくらなんでも浅ましすぎるな。変なフィルターを通して人を見るのは止めよう。

しかし美術室にほとんど人がいないのは計算外だったな。美術部員が活動しているんじゃないかと思ったんだが……。

美術部員だったっていう見澤の話を少しでも聞ければと思ったが……外したかな。

「何の用？」

うぉう。

「聞いていたのかよ」

その割にはこいつ、キャンバスに向かったままだ。

「何の用かと聞いたんだけど？」

やれやれ、なんて友好的な態度だ。
「何の絵だ？」
「ん、見てわからない？」
「柿の種」
「夕日だよ」
「だから今しか描けないってことだろ？　俺のことはいいから続けろよ」
「……ん」
しかしさっきから騒がしい音楽が流れているな。吹奏楽というよりは、ポップスサウンドと言ったほうが良さそうだ。……軽音部ってやつか。
それにもっと奥のほうからは合唱の声がする。なんかあまり集中できそうな環境じゃないな。
この建物の名前は確か、芸術部だったか。おそらく芸術方面の部活が全部この建物に入っちまってるんだろう。
……人がいない理由がわかった気がする。
……夕日の絵、か。
絵の巧拙はわからん。わからんが、なるほど、何か伝わってくるものがある気がする。
クラスの色による優劣の差はあくまでも目安に過ぎないって、朱姫が言ってたっけな。
ん？　筆を放り投げたぞ？
「ん、もういいや。集中できない」
「邪魔したかな」
「いや、音がうるさい。ピアノの方がいいな、僕は」
そういう問題か？
「で、何の用？　会ったことはないよね」
「吾川蒼輔。転入生だ。人を捜しているんだ」
「ん、明神猛（たける）。高等部三年緑組。誰を？」
「見澤灯。去年の１２月２４日に失踪したと聞いている。美術部だ

ったらしいんで、彼女の友人でもいないかと思って」
「転入生がどうしてそんなことを？」
当然の質問だな。
「ただの興味本位だ。こういったら気に障るかも知れないが」
「別に気にしやしない。だが、見ての通り部員はいない」
「猛は、美術部員じゃないのか？」
「ん、確かに僕も美術部だが、見澤さんについて多くを知っているとはいえないな。人付き合いが苦手なんでね」
わかる気がする。
「他の美術部員はどこにいるんだ？」
「聞いての通りここはあまりいい環境じゃないんで、真面目な人はみんな別の場所で描いているみたいだ」
「猛が真面目じゃないみたいな言い方だな」
「ん、僕はあまり真面目じゃないな。絵なんて、気が向いたときにしか描かない」
「それでそれだけ描ければ上等だな。美術部員で、見澤と最も親しかった友人は？」
「さあ――絵は結局のところ個人種目だからね。しかもうちは部員が仲のいい部じゃなかったように思うな。もっとも僕の知らないところで部員たちは仲良くやっていたのかもしれない。ん、いずれにせよ、僕にはわからないな」
……うーん、ここは外れかな。
「今さら捜したところで、見つかるのかな」
ん？
「だってもう4ヶ月も経っているんだろう。その間出てこなかったんだから、急に見つかるはずがないと思うんだけど」
「それが道理だな。だが可能性がある以上、それに賭けてみたいと思う」
「……君はなかなか楽観的だ。……ん、僕の知っている限りで、見澤さんと仲の良かった美術部員はいない。それよりも、彼女には

信頼するクラスメイトがいた」
「住吉穂乃歌だろ。そっちとはもう接触している。というか協力してもらっている。なんだ猛、結構見澤のこと知っているんじゃないか。仲良かったのか？」
「ん、僕と仲のいい人間はいないよ」
「やれやれ、それでいいよ。見澤の失踪の動機について、思い当たることはないか？」
「ない」
「見澤は絵が上達してきたと友人に言っていたらしい。美術部員として、どう思う？」
「ん、彼女の絵が上達していたのは事実だな。そのことがモチベーションにもなっていたんだろう。失踪前――昨年の秋から冬にかけてか――見澤さんの絵は目に見えて上手くなっていた。……見るか？」
あるのか。
見てもよくわからないと思うんだが……。
「ほら、これだ。これが一年前の絵。これが冬ごろの絵だ。どうだ、全然違うだろう」
うーん、よくわからん……。
両方ともスポーツをしている場面の絵だな。確かに上手いと思うんだけど、どっちがどうといわれてもさっぱりわからん。
「むしろ失踪直前の絵のほうが、人間の形が崩れているような気がするんだが」
「ん、その通りだ。そしてそのことでスポーツの場面における迫力をよく表現しえている。つまり見た目の整合性に囚われず心に感じたままを画板に表現する方法を彼女は会得しようとしていたんだ」
熱っぽいなあ。
……心に感じたまま、か。
「なあ、絵から作者の心性を感じ取るってのは可能なことなのか？」
「絵にとって最も重要なことは作者の心理を如何に表現し得るかと

いうことだと僕は思っている。現実の正確な写実ということに関しては、絵はカメラに及ばない。それよりも絵は作者がどう感じたか、それをどう表現するかというのが大事なんじゃないか」
「絵画論はいいよ。この絵――失踪直前に描かれた絵に負の印象はないよな」
「ないな。この絵だけじゃなく、彼女の絵はどれも屈折がなかった。例えばこっちを見てみろ」
あるクラスの休み時間の風景ってところか。数人の学生が思い思いの場所に集まってクラスメイトと談笑している様子が描かれている。
「全体的に淡く明るい色使いで彩られ、線も細く軽く、休み時間の学生たちの開放的な空気を表現している。これを僕が描いたとしたらもっと暗く、端のほうでつまらなそうにしている生徒が存在する絵になっていたはずだ」
お前なあ……。
「これを見ても灯が普段どう世界を捉えていたかが理解できる。芸術家としては情念のようなものが足りないきらいがあるが、しかし一人の人間としてはひねくれたところのない非常に好感の持てる人間だったといえるだろうな」
……なんか、見澤の失踪とは関係のないものがわかってきたような気がする。
「いずれにせよ、失踪直前の見澤が悩みとか憂鬱を抱えていたって線がないことは、この方面からも示唆されるわけだ。だが、だとするとやはり問題になるのは動機だ。猛、お前見澤に恨みがある人間誰か知らないか？」
「ん、知らないな。見澤さんはだれかれから恨みを買うような人じゃなかったと思うけど」
「なら逆に、誰かからストーカーみたいな、偏執的な妄念を抱かれていたとか。……まさかお前か？」
「どうして僕がストーカー行為なんてしなくちゃならないんだよ」

うーん……やっぱり行き詰まりか。
勘弁してほしいな。
「……蒼輔、見澤さんは、どこへ行ってしまったんだろう。どうしてどこかへ行ってしまったんだろう。もうここへ戻ってくることはないんだろうか」
やれやれ、ここにも見澤灯を案じる人間が一人、か。
人が一人いなくなるというのはたぶん、大変なことなんだな。
どうしても、見澤灯は見つけなくちゃならない。
だが、どうすればいい？
くそ、俺は無能だ。最善の手が思い浮かばない。
「蒼輔、二つ、頼みがある」
「なんだ？」
「蒼輔はこのあとも見澤さんを捜すんだろう。その過程でもし、彼女が描いていた絵を見つけたら、僕にも見せてほしいんだ」
「絵だったら、そこにしまってあるんじゃないのか」
「ん、部員はここ以外の場所で描くって言っただろう。見澤さんは比較的ここでもよく描いていたが、彼女、別の場所でも何か描いていたらしいんだ。それは僕が頼んでもどうしても見せてもらえなかった」
「……もう一つは？」
「見澤さんを見つけたら、いつでもいいからここへ連れて来てほしい。実は彼女をモデルにした絵が描きかけなんだ。それを完成させたい」
「二つ目の頼みはわかった。最初の頼みは聞けない。それは、見澤が見つかったとき、自分で頼んで見せてもらえ」
「ん……見つかるか？」
「正直、わからん。だが、見つかるさ。今はそう言うしかないな」
――――

「――と、今日俺がやっていたことはこんなところだ」
「うーん……」
京一も穂乃歌も机の上のコーヒーに手をつけていない。見澤灯の捜索が行き詰りつつあることをふたりとも感じているんだろう。
やれやれ、集まって互いの成果を報告しあったところで、成果がないに等しいんじゃどうしようもないな。
「ま、コーヒー飲もうぜ。俺は飲む」
これってやけ飲みか？
「やっぱり見澤の失踪以降、カードキーの紛失届けはない、か」
「久万先生に確認してみたけど、やっぱりそうみたいだね。もちろん紛失したのに届けを出していない生徒がいる可能性はまだ残されているけど、たぶん」
「これで見澤が盗んだカードキーを使って寮から抜け出したって線は消えたことになるな。穂乃歌、見澤が残していった荷物の中にカードキーはあったのか？」
「わからないっ。ご両親に確認してみたけどっ、そこまで把握してるわけじゃないって」
「……見澤の部屋は失踪当時のままなのか？」
「んっ？　そのはずだよ。灯が戻ってきたときのために、ご両親がそのままにしているんだって」
見てみたいな。カードキーもそうだが、失踪の手がかりになるものが何か残っているかもしれない。
「他に今日一日で何か成果はなかったのか？」
「ないね。とりあえず考え付いた限りの人間に灯さんの話を聞いてみたけど、誰も有益な情報は持っていなかった」
「あたしもっ。灯と仲良かった子にもそうじゃない子にも話聞いてみたけど、やっぱり誰も何も知らないって」
「そうか。勘弁してほしいな」

一番わからないのは、失踪の動機だ。
自発的な失踪だとするならば、失踪前の見澤に動機らしいものが見受けられない。これが拉致などの犯罪に関わることなのだとしても、だったら誰にその動機があるのかという疑問に行き着かなくてはならない。
京一と穂乃歌には見澤の交友関係の中から見澤に恨みのありそうな人間を探してもらっていたんだが、成果はなかったみたいだな。
「そういえば、久万先生に聞いたんだけど、灯さんの絵が入選したんだってー」
「なんだそりゃ」
「失踪前にコンクールに出品してた絵が、そのコンクールで入選したって」
「そうか。絵が上手くいくようになったってのは、俺も聞いている。でも、上手くなったってのと失踪は関係ない気がするよな……」
「悩んでいたんならともかくね」
「穂乃歌、その辺のことは見澤からは聞いてないのか？」
「えっ。あー、えっと、えっとーっ、そ、そうだね。ちょっとは絵が上手くなったよってのは、灯、言ってたかなーっ。あはは」
「……穂乃歌、お前明らかに様子がおかしいぞ。……何か隠しているな」
「えっ、ま、まさか。そんなわけないじゃん」
「穂乃歌さん。蒼輔は真剣に灯さんを探してくれてるんだから、隠し事はよくないと思うよ、たぶん」
「いや、別にいいよ」
「「え、いいの？」」
ふたりでハモるなよ。
「穂乃歌が言えないと判断していることなら、無理に聞くつもりはないよ。失踪に関係あることなら、言えるときがきたら言ってくれればいいし、関係ないんならそのまま秘密のままでいい」
「蒼輔……」

「どうだ、俺かっこいいだろう」
「うんかっこいいよ蒼輔。すごい」
はっはっは京一が拍手してくれてる。いや、つっこんでくれよ。
「蒼輔っ、ごめんね。灯と約束したから、言えないことはある。でも、灯の失踪とは関係のないことだから。そのはず、だからっ」
「わかった。それでいい」
「でも実際、手詰まりになった感はあるよね、たぶん。これからどうするの、蒼輔」

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1929x/

讃神学園事件

2011年12月24日05時45分発行